



380
306



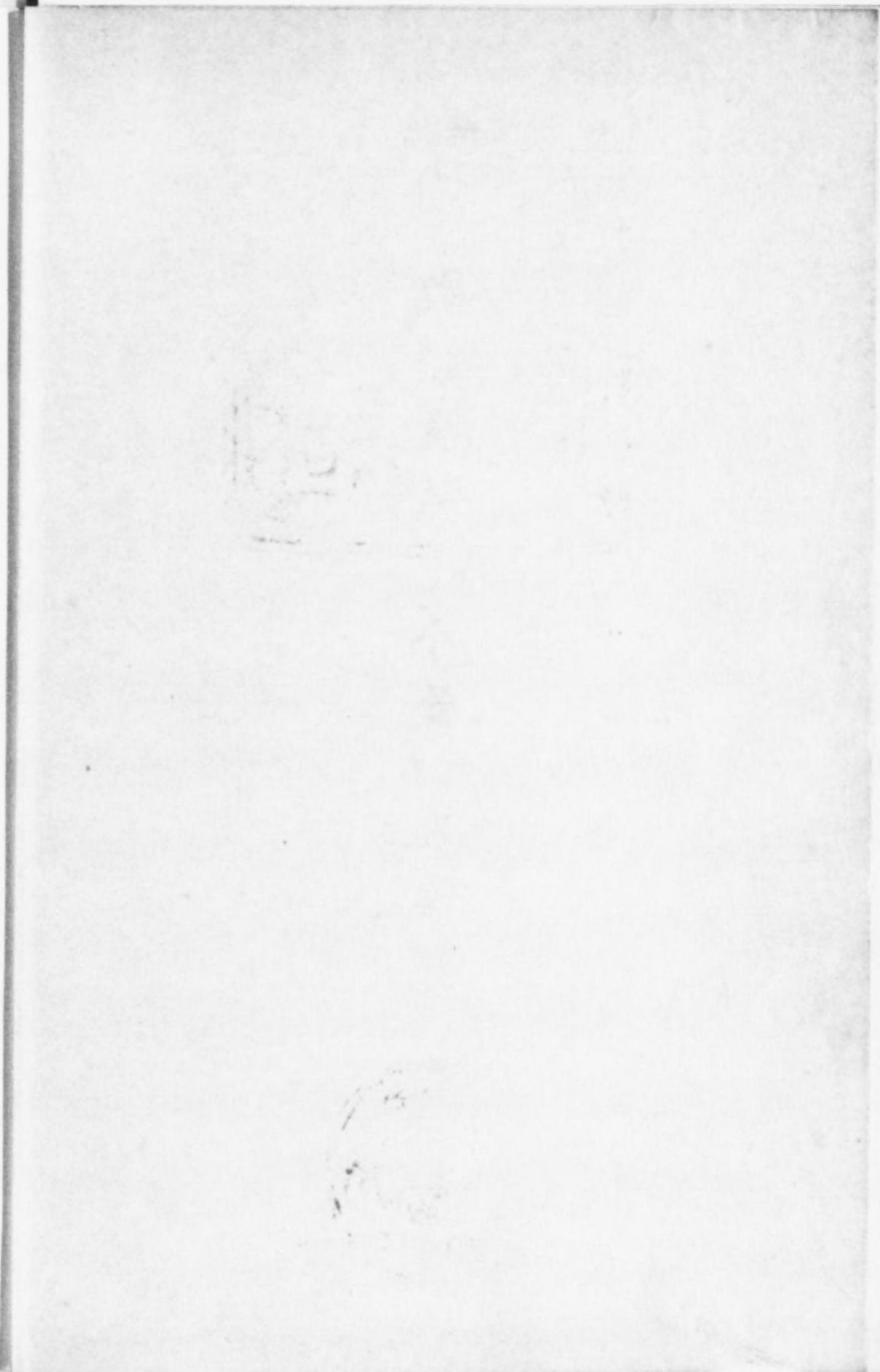
始



特 263
510



教祖訓誡
七
个
條
並
歌
文
集



日ニ書ル心ノ一冊

- 一 神ノ人ノ書ノ信ノ也也
- 一 腹ノ主ノ物ノ書ノ也也
- 一 已ノ海ノ人ノ也也
- 一 人ノ也也
- 一 丹ノ病ノ時ノ也也
- 一 漱ノ也也
- 一 日ノ部ノ也也
- 一 石ノ除ノ也也
- 一 思ノ也也
- 一 主ノ也也
- 一 也也

340-306
~~343-623~~

凡 例

- 一、本書は、黒住教教書第一輯、同第二輯、第一補遺、及び第二補遺に收められたる、御歌文を収載せるもの也。
- 二、右の内にて、日用御書翰及び御初穂覺留帳は之を省きたり。又書名を袖珍御歌文集とかへたり。
- 三、御歌の殆んご相等しきものは、省きて一首のみを載せたり。
- 四、御歌及び御書翰の番號は錯綜せるを以て卷末に番號索引を附したり。
- 五、御歌文の原本所藏者氏名及び其住所は省きたり。若し其等につきて研究せられむとする人々は、教書を見らるべし。

宛	弘	弘	弘	天	天	天	天	天	天	天	天	天	天
	化	化	化	保	保	保	保	保	保	保	保	保	保
名	三	二	元	十	十	十	九	七	五	二	元		
順	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年

	二二九頁	二二八頁	二二七頁	二二四頁	二一二頁	一九八頁	一九三頁	一八四頁	一八〇頁	一七四頁	一七一頁	一六八頁	一六一頁

第三	雜集	三四五頁
第四	道連年覺留	四〇五頁
第五	門人名所記	四三三頁
第六	御年譜	四八一頁
附 錄		
	御歌文番號索引	一頁
	御歌文內容索引	九頁

第一歌集

晴窓文内書表目
晴窓文書表目

第六編 平氣

第五編 門人外氣

第四編 筆氣

第三編 筆

一〇〇頁

一〇〇頁

一〇〇頁

一〇〇頁

一〇〇頁

一

○ 歳旦 子 歳男

悪をさるとしのはしめのけふよりは

よきことを取道ひらきせん

奉御歳徳尊神

二

○ 朝かほの花の姿に迷ふなよ

日かけまつまにしほみぬるかな

上宗忠

三

○ 天てらす神の御内に住みなから

われと魔道へおつる憐れさ

四

有かたきことありしまゝをよめる

○

天てらす神の御心人こゝろ

ひとつになれはいきとふしなり

○

五

申のさしはしめてよめる

天照神の御とくに悪はさり

よろすの善は心にそ有

宗忠

○

七

天てらす神の御徳のまさるとし

いく末なかく子こそつよかれ

八

天照す神の御徳を知る時は

ねてもさめても有かたきかな

○

九

天てらす神の御徳を世の人に

のこらすはやく知らせ度もの

○

一〇

天てらす神の御はらに住人は

ねてもさめてもおもしろきかな

一一

鳥かなく東のはてもいまこゝも

藤原宗忠

おなしまことこのうちとおもへは

六

三 天照す神の宮居に住人は

かきり知られぬ命なるらん

○

三 君東におもむき給ふをこ

とほき奉りてかく祝し侍

天てらす神諸どもに行人は

日こと／＼にありかたきかな

宗忠

○

一四 天照す君の光りは千早振

かみ世も今もかわらさらし

○

一五 天地とおなひとしなるみちのとも

かわり給ふな萬世までも

印

○

一六 歳旦

有かたやこころひとつにていつま

てといふかきりなき命さいうこと

を御かほにてささり辨しさのあま

りかくよめり

天つちにおとらぬほとこのいきものは

七

歳徳尊神

己かこゝろごおもふ嬉しさ 藤原宗忠

八

一七 天地にたつた一つの活物を

けかす人こそ悪魔成けれ

○

一八 道の歌よめる中に

天地の心のありか尋ぬれば

おのか心のうちにこそ有ける

○

宗忠

一九 爰に一首うかみしまゝ

天地の心はおのか心なり

ほかに心の有とおもふな

二〇 また此歌に迷ひ給ふな其心を

なきというなきには人の迷ふらん

なきこそ有の本の本なり

○

二二 天地の中に照り行御寶を

今こそ取得し心樂しき

○

二三 天つちの中にひとつのその山を

あらはすものは君はかりなり

九

二三

誠に有かたきことありし時よめる

天地の中にひとつの○うち

をのかこゝろのすみか成らん

宗忠

二四

天地の中の誠にすむ人は

うむもしやうしも何かいとはん

二五

天地の誠の中に住人は

うむもしやうしも何かいとはん

一六九

天つちのまことの中に入ぬれは

うきよの夢もわすられにけり

上宗忠

二六

天地の誠の道をおふけなく

ふみわけそむるけふにも有哉

道の歌よめる中に

藤原宗忠

二七

天地のみにまよはぬこゝろこそ

生れすしなぬこゝろなりけれ

二三三

道の歌よめる中に

天地を我身のうへと思ひなは

わかきもおるも心成るらん

宗忠

二八

あら嬉しかゝる嬉敷淨世そご

知らて今迄過しおしきよ

二九

あら嬉しかゝる嬉敷世としらて

今までをしき世をゝくりける

試筆

藤原宗忠

三〇

改玉のとしのはしめのけふよりは

萬のたからこゝろまかせに

奉御歳徳尊神

三一

あらたまる心ゆるさす一すしに

誠はかりて悪をさる年

三二

ありかたき君のよはいはかきりなく

つるやかめにもまさるめてたき

三三

有かたきけふはまれなる天社日

こゝろにちりももさめさらまし

○

三四

しんしんのこゝろをよめる

有かたきまた面白き嬉しきと

みきをそのうそ信成けれ

宗忠

○

三五

我國のしんしんの心をよめる

有かたき又面白き嬉しきと

みきをそのうそ誠成けれ 藤原宗忠

○

〔東照宮御訓書〕を手寫し給ひたる後に書きつけ給へる

三七

有かたやかゝるおしひの御おしへを

きくにつけてもなみたこほるゝ

○

〔東照宮御訓書〕を手寫し給ひたる後に書きつけ給へる

三八

有かたやかゝる賢き御をしへは

きくにつけても涙こほるゝ

黒住宗忠謹而書印

○

三九

有かたやかゝるめてたき世に出て

たのしみ暮す人そ一とく

○

四〇

有かたやかゝる目出度世に出て

たのしみくらす身こそ安けれ

宗忠

四一

二日神前に向ひこゝろすみ渡
る有かたさのまゝをよめる

云

宗忠

有かたや心の雲もはれわたり

うきよのくもはとにもかくにも

○

四二

有かたや我日の本に生れ來て

さてその中に住とおもへは

宗忠

○

四三

有かたや我日の本に生來て

その日とともに暮す心は

四四

天 心 説

○

有かたや我日の本に生れ來て

その日の中に住とおもへは

○

四六

難有や我日の本に生れ來て

其日の本に住とおもへは

○

四七

有かたやわれ日の本に生れ來て

其日の本をしるとおもへは

四八

神のます道のをしへを本として

七

樂み深き老初のはる

四九

神のます道のおしへを本とせは

若きもおるもなきそたのしき

五〇

有と見てあるこそ己か姿なり

ありて迷はぬ身こそ安けれ

五一

有と見て無こそおのか姿にて

なきすかたこそ生とふしなり

五二

ありと見て無こそもとの姿也

なきに迷ふな無こゝろにて

五三

有と見てなきこそもとの姿なれ

無きをたのしむ心やすきよ

一七一

有と見てなきこそ己か住かなり

なきを樂しむ身こそ安けれ

五四

有と見てなきこそ元の姿なれ

なきを養ふ身の樂しきは

一七二

有と見て無こそもとの姿なり

三

なきを養ふ身こそ安けれ

○

一七三

有と見てなきこそもとの姿なれ

なきを養ふ身こそ安けれ

○

一七四

ありなしをはなれんと思ふ心こそ

其ありなしのこゝろなりけれ

一七五

姿無き心を生て遣ひなは

あめかしたにそみち渡るらん

○

一七八

大はらひのときよめる歌に

有物は皆吹はらへ大そらの

なきこそおのかすみか成けれ

○

一七九

道執行の時有かたき

こそありし時よめる

有ものはみな吹はらへ大空の

なきこそをのか住か成けれ

○

宗忠

一八〇

数のはらひよめる

時の歌に

三

有物はみな吹はらへ大そらの

なきこそをのかすみか成けれ 藤原宗忠

○

六二

はらひの歌よめる中に

有物はみな吹はらへおふそらの

なきこそもとの住家なりける 宗忠

○

六三

有ものは皆ふきはらへ日月こゝろ

無こそ己か住かなるらん

○

一七四

有無の中に住へき無物を

なきとおもふな無心にて 上宗忠

○

六四

いきしには心ひとつに有物と

しらぬ浮世の人の憐さ

○

六五

活死も福もひん苦も心なり

こゝを知るこそ誠成らん

○

歳暮

六六

六十の暮よめる

出る日をおのか姿とおもひなは

藤原宗忠

重ねし年も苦しからまし

奉 歳 德 尊 神

六七

命こそ心のまゝになるものを

たれか別かれをなげくなるらん

一七五

命たゝ心に叶ふ物なれば

たれか分のもうかりける

六八

(此の次に左の一首の歌あり)

明日有さおもふこゝろにほたされて

けふも空敷日を、くりけり

六八

古しへも今もむかしも此頃も

昨日もけふもおなじしみちなり

七〇

公のつとめにより君こ

たひ東へおもむき給ふ

により日々祈り奉りし

心をよめり

今こゝとどふき東とへたつれと

心はおなし ● き中なり

(此御歌は次の如き三首の歌の後に誌し給ひしもの也)

生業に怠ぬ身はちよ經とも

衣食住居のくるみそなき

天地の道をそむかすまもりなは

衣食住居そやすくゆたけき

神聖佛と道はわかれても

あしきをさくる教なりけり

今君のおしへ給ひし御歌こそ

すぐに神世のおしへ成けれ

七一

いやたかき雲居に光る君か世の

天か下をもてらし給へよ

三

此一の道歌

(此御歌は一を一とするが大切なりと云ふ事を手寫し給ひたる奥に書付け給ひしもの也)

一七六

一を知る人こそ一よ萬代の

命を照す日の本の人

一七二

うき事は皆夢の世と思ひなは

さめなん事の樂も敷かな

宗忠

一七八

浮舟に長く乗たくおもふなら

こゝろのかしのゆたんするなよ

上宗忠

三

七三

海あれば山も有つるよの中に
せまき心をもつな人々

云

七四

道の歌よめる中に

有無の山生死の海を越ぬれば
こゝそ安樂世界なるらん

宗忠

七六

嬉敷もかなしきもまた心なり
みな嬉敷とおもはさるかな

七七

鬼もじやもみなきりはらい活ものを

七八

大やまと小しまくご別れとも

養ふひとにいたつきはなし

その水上はあはししまやま

上宗忠

一八〇

此春は是のぬしの初て老初めに
若子をもふけ給ひしを祝して侍

老そめにくなこの神の若竹を

恵み給ひし身こそ樂き

七九

かきり無命としらて世に移る

元

花もろともに散るそはかなき

言

上宗忠

八〇

かきりなき命のみちを道引かん

重ねたまへよ萬世までも

宗忠

八一

かきりなき命の本のあらはれし

道のはしめに人と成りぬる

宗忠

八二

己に勝ちて神と一鉢

かくなれはいまよりのちは天地の

中は我身のうちと成るらん

藤原宗忠

八三

かしこくも日月のうみたる人なれば

日月の恵の有そ尊とき

八四

神風や伊勢とこゝとは隔つれと

こゝろはみやのうちにこそあれ

八五

神風や伊勢と爰とは隔れと

こゝろは宮の内に住らん

宗忠

一八一

年ごとに咲やよし野の山櫻

八五

木をわりて見よ花の有かは
さしあたる事の葉ばかり思へかし

踏らねむかししらぬ行すふ

八六

心たに誠の道にかなひなは

いのらすこても神や守らん

神風や伊勢の御神のみ心を

いかゝとひて君歸りませ

神のみかけうけて五十鈴の川の瀬に

こころのあかを君そゝかなむ

八七

神風や伊勢ごこことは隔つれと

(左の御歌は右の五首の
歌の次にありしもの也)

八六

神といふ佛というも天地の

誠の中にすめる活もの

○

八七

神のますおしへの道をもとゝして

樂み深き老初の春

○

八八

神のますをしへの道を本とせは

若きも老も無そたのしき

○

八九

神佛おのか心にましますに

たをいのるこそ憐れ成けり

○

九〇

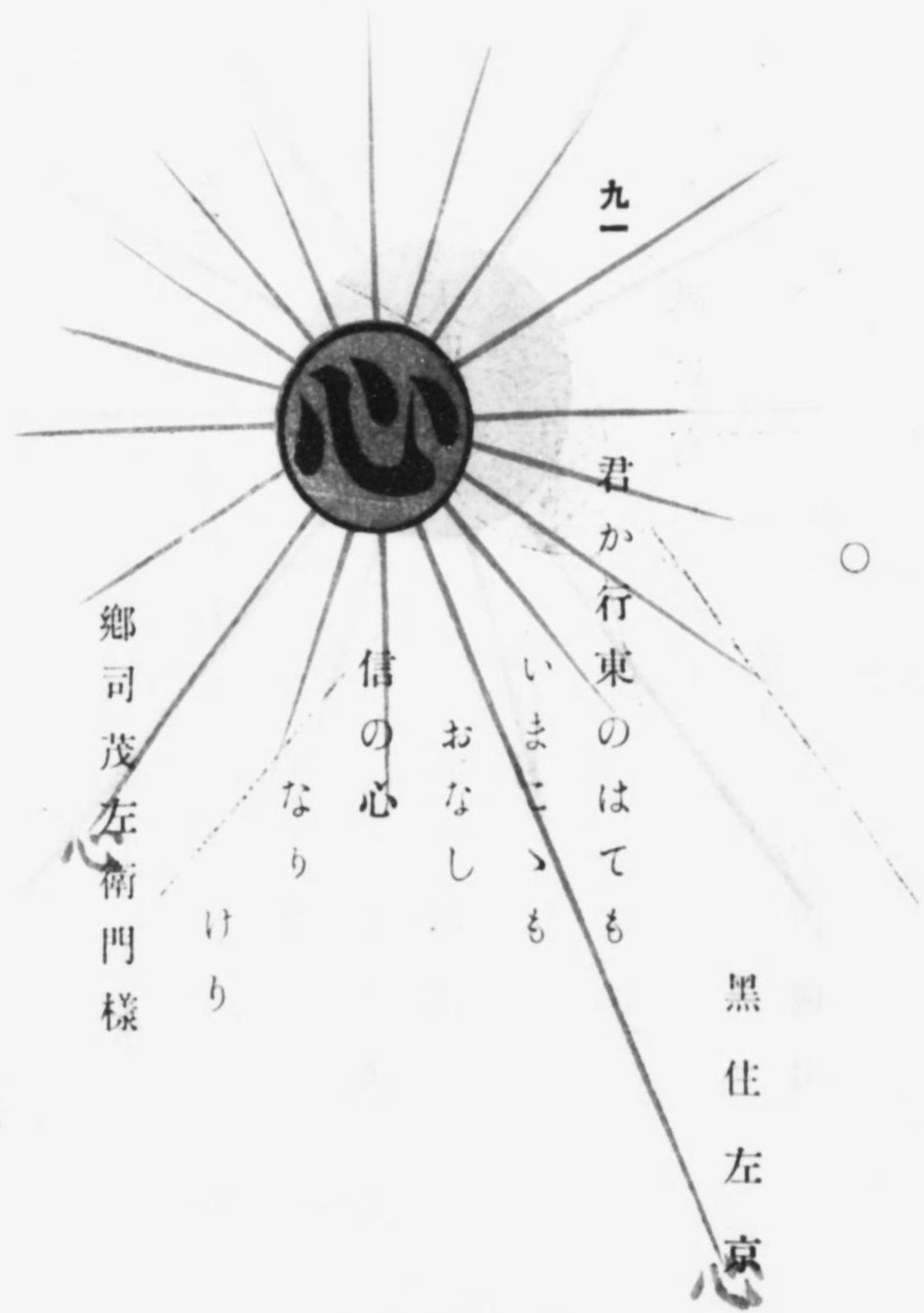
東へたひ立給ひしを祝し

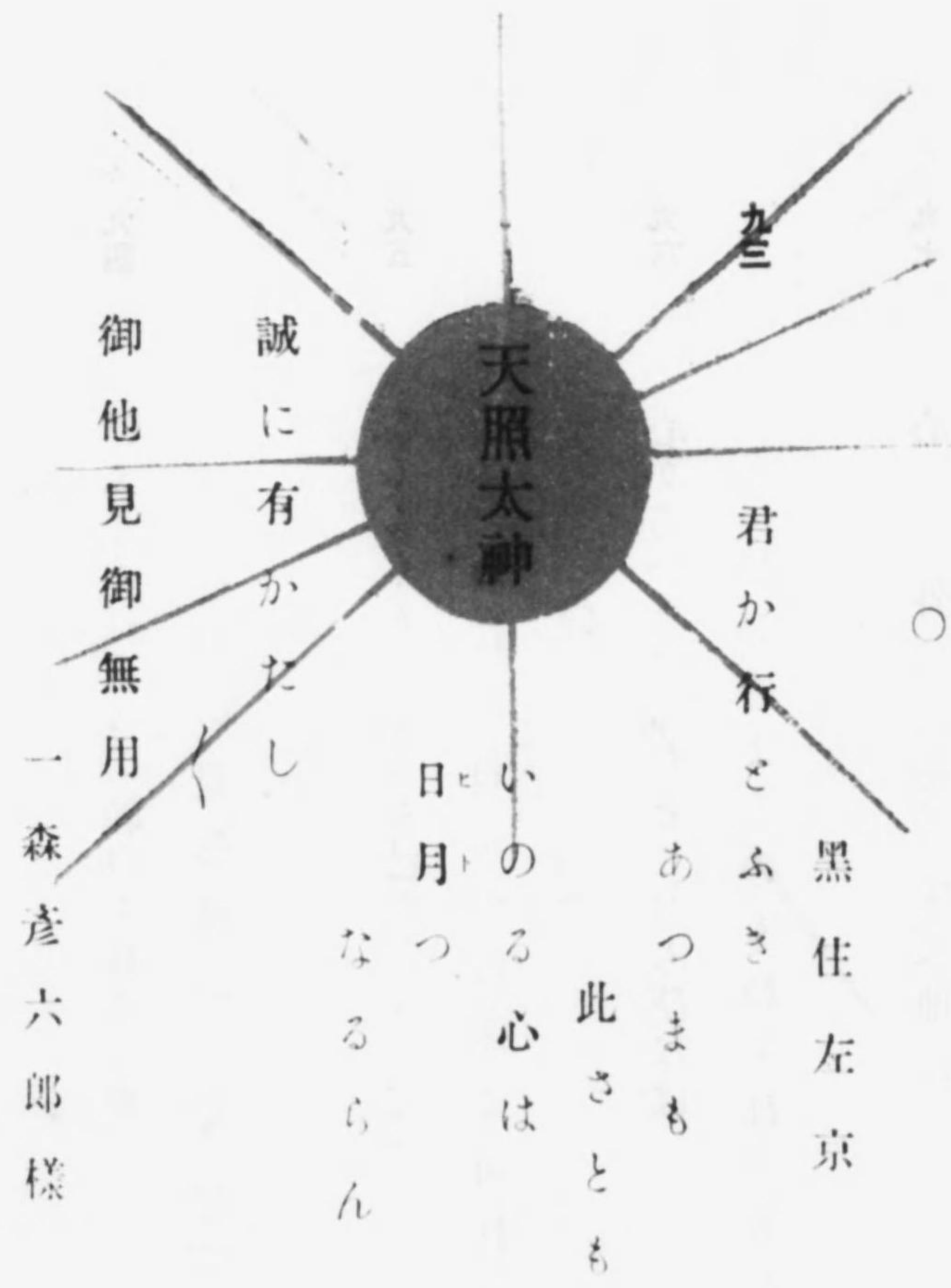
奉りてかくはへりぬ

藤原宗忠

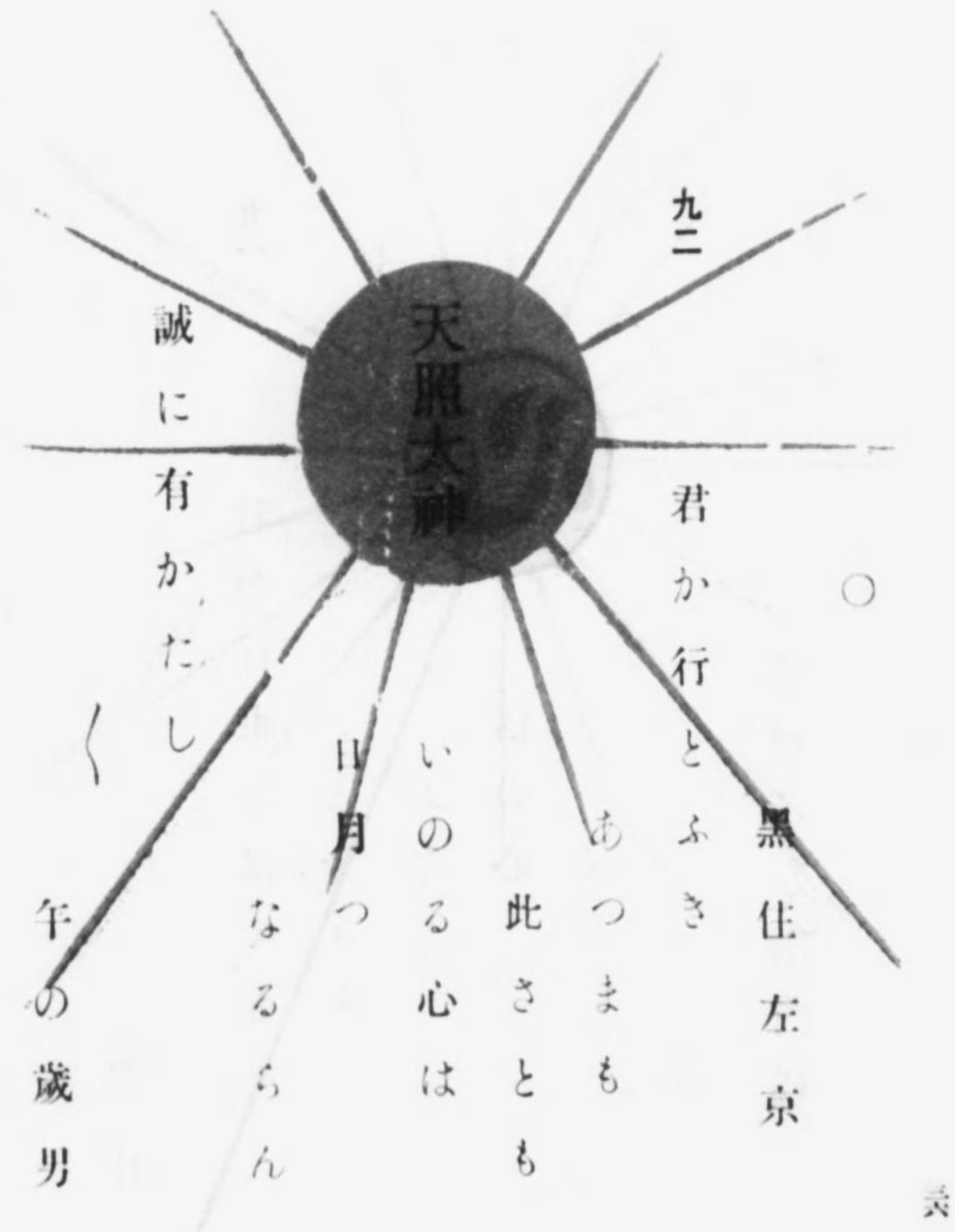
君か行東の末もこのさとも

天てる神の御うち成るらん





毛



表

九四

けふこそはちゝの願ひも移るらめ

みつの社の神のかゝみに

九五

こくらくもぢごくも己かこゝろなり

おにのねぶつに迷ふ憐れさ

九六

心からいきごふしそとおもひなは

としのよるのもわすれけるかな

九七

心とは外にはあらず天地の

うむをはなれし中の活もの

此御歌は門人還曆の壽に
今年よほひも六十一になれば
ことしより三つ子になりて天地の
めくみにそたつ神のふところ
と詠出たれば教祖之に示し給ふ爲其紙に
書付け給ひし者也

九八

今年より三つ子となるも有かたし

赤子となれば猶有かたきかな

九九

是ほとに面白き世にすみながら

くるしむ人を憐れ成りける

○

一〇〇 さしあたる事のみおもへ人はたゝ

きのふはすきる明日は知られす

○

一〇一 姿なき己か心としりなから

すかたに迷ふこゝろくるしき

○

一八二 姿こそかりのうつはと思へとも

かく成給ふ今のこゝろは 宗忠

○

一八四 姿をはちりあくたにてうつむども

こゝろはもとの君と遊はん 靈神歌

○

一八五 姿をは千々に分つゝ遣へとも

きみか誠に敷ものはなし 宗忠

○

一八七 七ヶ條のとめの歌によめる

立向ふ人のこゝろは鏡なり

おのか姿を移してやみん 藤原宗忠

一八九

幾度も鶴の千年をくり返し

かきりしられぬ君か世わいは

一九〇

千年ふる君か世はひはいにしへの

神ならずして誰かしるへき

(此御歌は、天保六年、紅屋與介病氣平癒御祈念の御被の数を誌させられたる紙の終にありたるもの也)

一九一

大願成就仕候得はまた一万度

御禮に執行可仕候者也

千早振神世はしらす今のよに

かゝるためしはよもや有まし

一〇六

むかし尊き入のみ歌にかんし

奉り予か今のこゝろをよめる

月は入日の今いつるあけほのに

我こそみちのはしめ成けれ

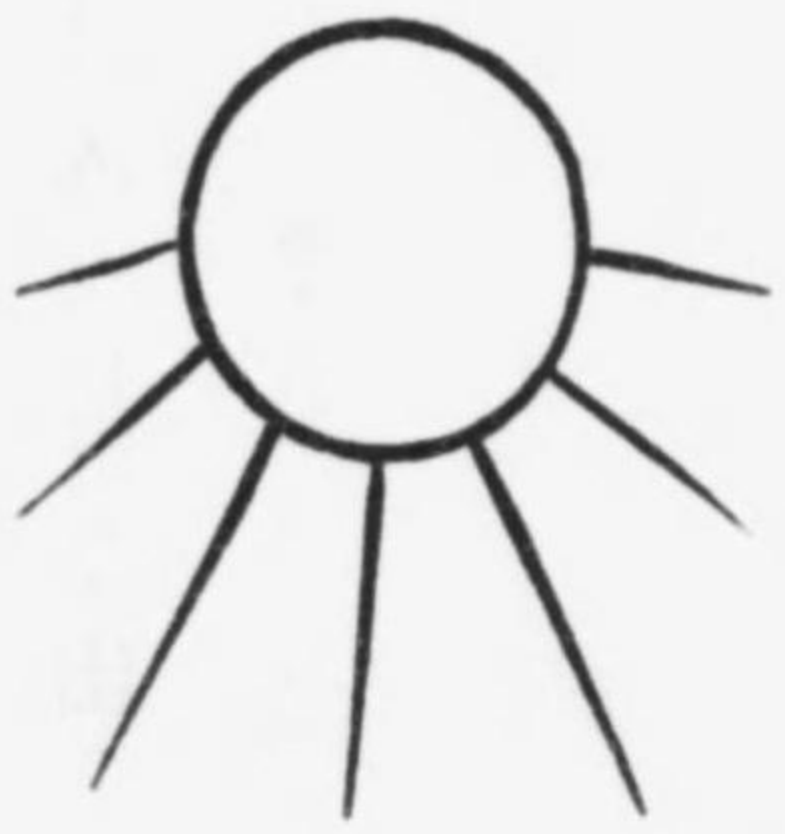
黒住左京藤原宗忠書

一〇七

月は入り日は今出るあけほのに

我こそ道の始めなりけれ

藤原宗忠七十書



興

月は 我こそ
入 みちの

はしめ 日の
今出る
成けれ 明ほのに

月は入日ははや出し時までも
ねて暮すこそあはれ成けれ 宗忠

露霜にむすべるつみのくやしきを
おもひとくこそ朝日なりけれ

つきたてる心の柱ふとければ
千世もうこかぬ家と見へける 宗忠

鶴龜も千とせのちはしらるゝに

七

あかぬ心に任せはてゝむ

興

一一〇 鳥かなくあつまの道は遠くとも

まことを行はたつた一あし

宗忠

一一三 何となくもりし雲も吹はらひ

たゝうるは敷けふのそらかな

天地神へ奉る

一一二 何事もこゝろのまゝにかなひなは

ねてもさめても有かたきかな

一一三 天つちにまかせまつりし我身には

あたへ給ひしことの嬉しさ

一一三 何事もこゝろのまゝにかのふゆえ

ねてもさめても有かたきかな

宗忠

一一四 何事も心一つに有ものと

しらてうき世に迷ふ人々

一九八 何ことも天のものにてあるものを

わかもの顔てつくるつみとか

興

一九九

何ことも天のものそとおもひつる

君の心そまこと成るらん

二一五

何ことも望み無ければ世中に

たらぬことこそなかりけるかな

二一六

生死を天に任せし人なれば

むまれすしなぬ道に行なん

二一七

迷ひほと世におもしろきことそなし

まよひなければ樂もなし

一九六

無物をたひせつにせよみな人は

なきこそおのか住か成らん

(此間に左の二首の歌あり)

人多きひとの中にも人そなし

ひさゝなせ人ひさゝなれ人

鏡山人のしかからさき見えて

我身のうへはかえりみつうみ

一九七

皆人の悪敷はをのか姿なり

よくかえりみよ清き心を

は則日月也

二〇〇 何ことも望みなければ世の中に

○ たらぬことこそなかりけるかな

二〇一 生死も天に任せし我なれば

○ むまれす死なぬ道に行なん

二〇二 迷ふへき人の心そたのも敷

○ まよひなければ楽しみもなし

二一八 何こともみな天命とおもひなば

○ たゝ有かたき斗成ける

（此御歌は『身を身さもおもはぬほさになりわれは何國に住めさ住よかるらん』と云ふ古歌の後に誌し給ひしもの也）

二〇三 何事もみな夢の世とおもひなば

○ 夢のうきよもおもしろきかな

二〇四 花咲てみのらぬ春のおふかりき

○ 時來て實のる秋のよそほい

二〇五 瓜うりか片荷の瓜をうりきりて

のころかた荷はなすひ斗そ

高

以心傳心教外別傳

燈の消て行へはなかりける

くらきかもとの住かてもなし

一つ以て是をつらぬく心なら

ひさつの外に何もと無べき

すてぬれはみたま我身もなかりける

天をも地をもつらぬきやせん

(左の御歌は右の四首の
歌の次にありしもの也)

祓へどもまたはらへどもはらへとも

はらひかたきは出る雲かな

二〇六

出る雲たゝそのまゝに置ぬれは

またはるゝ時待そ樂しき

二一九

日々に朝日に向ひ心から

かきりなき身とおもふ嬉しき

二二〇

日の本に生れなからに日を知す

ゑた葉にともすひをかりて見る

五

二三

日の本の其日の中に入ぬれば

共

よるひるもなくおもしろきかな

二〇七

ほしきまゝ光りかゝやく此くにを

しらてへたつるみちにまよふな

二〇八

大やまと小しまゝと替れとも

そのみなかみはあししまやま

二〇九

姿こそみなそれ／＼にかはれとも

こゝろのものはひとつなるらん

二一〇

天てらしましますかみも我かみも

日止津ひとつ實屋井のうちに清むらん

二一一

君東へ行給ふを祝し朝暮

新り奉り候こゝろを

信とはみな〇ことときく時は

あつまもこゝもおなし日の中

宗忠

二一二

迷ひこそ世に恐敷物はなし

おにとしりつゝくはれぬるかな

五

一二四

迷ひほど世におもしろきことそなし

天

まよひなければ樂しみもなし 藤原宗忠

○

一二五

迷より大事とおもふころいて

迷をされば大事なきなり

一二六

大事そとおもふ思ひも迷成

みな打はらひ何もなき身は

○

一二七

みちとせになるてふ桃のよはひをは

君にゆつりて萬代やへん

○

一二八

水上は清き流れの末なれと

よ渡るふねに水のにこれる

上宗忠

○

一二九

水中にをし出す舟に乗移り

かせにまかせて行そたのしき

上宗忠

○

一三〇

みねはおろかしらぬつくしのはてまでも

天の光りのもるゝことなし (富士の繪ある扇面)

○

『一休禪師法語』寫本の奥に『願はず道
身に限有道を道にて
のみちたる道に行ん道の道たる道に任
て』とある後に

一三〇

此歌のおもしろきにつき
つたなくも予も心にうか
むことをかくはへりぬ

身の限り有とおもふも迷ひにて

空

來らすさらぬ道を願はん

時に天保五年午三月下旬寫之

藤原宗忠書

一三一

天地は廣き物かとおもひしに

我一心の中に有りける

宗忠

○

一三二

歌に

身のつらき時には神が戀しくて

たすけられては神はそちよれ

それでは天がゆるし給す

御ゆたん有へからす

○

二二五

身を捨てゝうかむ瀬も有世渡りに

舟のみをしむ身こそかなしき

○

一三三

身も我もこゝろもすてゝ天地の

たつたひとつの心はかりに

宗忠

○

一三四

道の歌よめる中に

身も我もこゝろもすてゝ天地の

たつた一つのまごとはかりに

上宗忠

空

一三七 身も我もすてんと思ふ心なる

○ 其心をもすてまほしさよ

一三八 たもつともまたすつるごもおもふまし

たゝ樂しみの心はかりに

一三九 たのしみも我樂しみとおもふまし

たゝ天地の樂しみにして

一四〇 〇 むかしより今に替らぬ世中を

心からして末ごおもふそ

二二六 昔おもふ百そふはひの上のこと

叶ふてみてもまたふそく有

一四一 〇 むつか敷おもふ心そ地獄なり

やすく嬉敷こゝろこくらく

二二七 天命に叶ふこと斗成就可致ものなり

〇 ありかたきくく事なよめる

向ふことみな御影そとおもひなは

ねても覺ても有かたきかな

宗 忠

一四二

夢の世をゆめとおもはぬ心こそ

まことの中のこゝろ成りけり

上宗 忠

○

藤原宗忠

一四三

夢の世をゆめとしれとも覺やらす

さめたる人のこひしかるらん

○

一四四

(虫喰)たに寄ておもへば

昨日の花けふの夢とはきつれと

今の嵐はうらめしきかな

一四五

またおもひ直して一首

世の花は散はやちれよ天地に

つきせぬ道のはなを咲せん

○

二二八

世に咲る花をはよ所に天つちに

つきせぬ道の花をさかせん 藤原宗忠

○

二二九

世のちりをはらひすてたるわかこゝろ

まことの中になかくあそはん

○

二三〇

よか今のこゝろよめる

世のちりをはらひすてたる我かこゝろ

空

藤原宗忠

まことの中になかくあそはん

突

○ (大悪日の事云ふ文を手寫し給ひたる奥に書付け給へる)

時に一首

一四六

吉悪も心一つのことそかし

日の善悪はごにもかくにも

御一笑く

宗忠

一四七

我不斗庭先にて赤子をひろひ候

まゝ其名を信吉と改め候まゝ、其

心なかく侍る

吉悪も皆打すて、天地に

たつたひとつの信はかりに

一四八

ある夜夢によめる

世の中は大切にせよ年をへて

みはおはるとも皆己か物

宗忠

一四九

世の中はみな丸事の

うちなれは

ともに

祈らん



もごのこゝろを 六

日々奉祈候心の姿を又心に
うかみ候間御饒別に指上申候

目出たしく

○

一五〇 世の中を大切にせよ年をへて

みはおはるとも皆己か物

○

一五一 世のはなは散とも千世もつきすまし

君かまことの花のこゝろは

一五二 君ゆへに此世のはなをよそに見て

つきせぬ花をともに詠めん

一五三 とはおもへともおもかけを

夢になりとも見まくほしきよ

○

一五四 よはひこそ早五十にも成ぬれと

心は十九や廿ち成るけれ
らん

○

一五五 長いきなすることるをよめる

わかひ人しにともなくはいきめされ

いきさへすれはいきらるゝもの 藤原宗忠

究

もとのこゝろを 六

日々奉祈候心の姿を又心に
うかみ候間御饒別に指上申候

日出たし〜

一五〇 世の中を大切にせよ年をへて

みはおはるとも皆己か物

一五一 世のはなは散とも千世もつきすまし

君かまことの花のこゝろは

一五二 君ゆへに此世のはなをよそに見て

つきせぬ花をともに詠めん

一五三 とはおもへともおもかけを

夢になりとも見まくほしきよ

一五四 よはひこそ早五十にも成ぬれと

心は十九や廿ち成るらん

一五五 長いきなするこゝろをよめる

わかひ人しにともなくはいきめされ

いきさへすれはいきらるゝもの 藤原宗忠

究

一五六

我元の姿をたつぬるさ

○
いう心を請てよめる

我姿たつぬるにまた及ふまし

たゝ天つちに照り渡るもの

宗忠

一五七

なかしき事をはへる

我その、蟻か天地一口に

○
のむを見れともはらもふくれす

印
印

一五八

我道は死るばかりそ穢れなり

○
いきとふしこそ道の元なれ

一五九

世にかわゆきとおもふ人の姿はみな鬼也我

も鬼なり是なさをこれ其こゝろ神なり此所

一大事なり今日のまへにそのさまあれば

我といふ鬼のかたうてねけぬれは

○
世界をにきるはしめ成るらん

一六〇

我というわれほとをしき物はなし

七

おしむわれから我をうしのう

七

一六一

われという我ほとをしき物そなし

おしむわれからわれをうしのう

一六二

みちの歌よめる中に

藤原宗忠

千早ふる神世も今もおなし世を

みな末の世とおもふあはれさ

一六三

日の本に生れなからに日を知らす

ゑた葉にともすひをかりて見る

一六四

有物は皆吹はらへ大そらの

なきこそ己かすみか成るらん

一六五

有無の中に住へきなきものを

なきとおもふな無こゝろにて

一六六

身も我も心もすてゝ天つちの

たつたひとつの誠はかりに

第二書翰集

文政四年

四 石尾乾助様

黒住右源二

尊箱

三月廿一日芳札早々相達忝拜見仕候先以御道中誠に古今御仕合と承儲々目出度殊御道記拜見甚感仕於下拙も大に難有奉存候隨而爰元尊室様段々御快氣被爲成大方御平生に御坐候御賢父様益々御機嫌能次に小子も不相替世話敷相慕居申候得共御陰にてつかれも不仕難有仕合に奉存候此段御尊意易思召可被爲下候且執行口之事申上候様御申越被成候得共筆にては逆も相叶不申候得共彼

古歌に

村雲は幾重もかゝれそらにすむ

月はくまなき光り成けり

六

と御座候得はたとへ何事が出来候共本をすまし其事にまかせよきにすゝます悪によらすたゝ萬事天命に御まかせ被成候は、おしへはたどへ海山へたて候ども小子かうしやくも御みゝに入可申皆天地一躰に御座候間小子存寄と申はことばもなし常にすまし給ふそのほん本に御座候まま御こゝろすみさへ被成候ははや御きゝ被成候も同じ御事に御座候兼而申上候通口と筆さきは大に違候間委敷は小子筆にては相叶不申先は荒々如斯御座候恐々謹言

六

尊書度々難有奉拜見候先以向暑之節御座候得共彌御機嫌能御出勤被爲成候由珍重不斜御事に奉存候隨而當地御屋敷御兩方様益御機嫌能段々に御いきをい宜敷次に小子も甚世話敷相暮候得共つかれ

も不仕馳廻り申候此段少も御懸念被爲成間敷候申上たく御事は山々御坐候得共中々筆さきにては相叶不申乍去一口に申はじやうはらひと申事を御忘不被成是を生て遣申候得は外に道は無御座と奉存候ねてもさめても御心のはらひ一筋に御座候けだへなく祓給は心計心はこゝる也ほこる也彼日月なれば我なき處に到候なりわれなきはまことの日月カヒホなりしれた事ながら申上候彌御いかし御遣ひ可被成候猶追々申上候甚亂筆御尊免御覽可被爲下候恐々謹言

六月二日

黒住右源二

石尾乾介様

追而申上候先達而御頼被爲成候 御詫宣段々及延引甚不出來候得共心計はすみ候時仕候御落手可被下候餘書は追追可申述候以上

光

四一 一筆啓上仕候先次第に寒氣相増候得共益御機嫌克御出勤被成御座珍重不斜御事奉存候隨而當地 御屋敷御兩所様彌御機嫌よく所々會席えも不相替御出被成御親父様も次第に彼かうしやく御聞被成下拙に仕候而も大慶に奉存候皆々様段々御出精被成無此上も難有奉存候追々人も相増次第ノ上へも何となく相聞え未みじゆくゆへ難有つらき次第奉存候委細者定而御親父様より御申上被成候やと奉存候しかしなから至而世話敷少しは時により候得は困り居申候先達御頼被成候靈符宜敷執行仕候御頂戴可被成候御灰は十六日出迄指上可申候甚指急き亂筆用事斗委敷は追々可申上候恐惶謹言

十一月二日

黒住

石尾様

尙々先達而の御不快も此節は最早さつはりと被爲成候やと奉存候隨分ノ御用捨專一と奉存候下拙道も御出かけ時分よりは大違に御座候少し廣り過のやうに存萬事彌ひかへ居申候くは敷は追々申あけ候以上

八 先月十六日尊札同廿七日相達忝奉拜見候益御機嫌よく奉恐壽候しかし少々御腫物にて御難義遊はし候由隨分御用捨專一に可被成候則廿七日夕に冬至之日待奉拜候間御各一同に御平愈御祈禱仕候于誠其夕も凡五十人斗御出にて甚賑々敷御座候其夕も皆様御念書之趣申達候處各宜敷申上吳候様御申に御坐候毎々御噂斗仕候只今は彌皆様御出精にて一會も欠無し御出に御坐候其間に所々に集執行口御相談被致侷々難有御事に御座候御親父様益御出精遊はし此節

ははや一節とはきつとした事御坐候皆々御たかいに難有のみ御樂
 に御座候先達而御文通之趣彌感心仕候しかなから事をとらはず
 可得何事も天命次第に可被爲成候何國も日月は一たい候まゝかく
 御心さし御たて被成候はは此方にて朝暮各祈候間道は一本之木の
 如く御一鉢に榮申候と奉存候少々時を御待遊し可被成候甚世話敷
 此書面は於社にまことにかぶ筆にて鳥渡調猶宜敷只今も御祈念仕
 候申上度事山々御座候得共御文通調候間も無御坐くらいに御座候
 甚亂筆わかり兼可申段御尊免可被下候乍末御宿所様下拙ことも各
 別條無御座此段御休意可被遊候甚急き大亂筆早々恐々謹言

十二月朔日調

右源二

乾介様

一五二 只今社より罷歸書添申上候たとへいかほどの御病氣にても日月様

へ打まかせ被遊候は、御氣遣絶而無御座幾重も御うたかひを御は
 なれ御信心可被成候定而委敷御事は御親様より御申上られ候やと
 奉存候まことの心のみに相成日月様に奉打まかせ候は、あとは何
 につけてもたのしみ斗に相成申候于誠、少も、御氣遣不被爲
 成御ころの御惡心なきを御頼に立ても居ても御たのしみのみ可
 被成御座候左様得は此方のみち御一鉢と相成益御榮へ可被爲成候
 尙委敷は追、可申述候以上

一〇 當月朔日尊書同十五日相達拜見仕候彌御機嫌能被成御座候由奉珍
 重候しかなから未御腫物御直り不被遊由御難義様と奉遠察候御
 文面之趣御尤千萬に奉存候仰之通り則今夕御日待に御座候間宜敷

祈念仕候御頂戴可被成候隨而當地御兩所様尙々御勢ひ宜敷扱々難
有奉存候小子もますます御用え相成彌世話敷候得共こととも不仕
晝夜東西へ走り申候此段御安意思召可被爲下候且御歌の御心偕々
感心仕于誠涙流に及居申候何事も御面上ならては難申盡候彼御歌
をうけ給りて歌と申事も存不申候得共御笑草に

雲きりはしせんの風のはろうなり

なき身をしれはかくのこごとくそ

乍惶御自身を御自身と思召天地の物とおもひ給は、た、難有の
みに相成可申候委敷は年明目出度可申上候毎度毎度甚急き早々恐
々謹言

十二月十五日

右源 二

乾介様

尙々時候御るとい御勤可爲成候以上
追啓只今のきやう歌に身の無きと申候は兼而の目付にて無こそか
へつて有るなり天は則無にして則有なり人の心も其之通なり無に
してあり彌無物と被成候は、其御心いつまでもさらす心さらすは
御身もます々大丈夫なるへしあなかしこ

文政五年

一 如仰万里同風目出度申納候先以御機嫌能御越年被爲成御座重疊目
出度奉存候次に爰元御宿所御兩所様初小子道之人不殘嘉年仕此段
幾重も御安慮思召可被爲下候右者年詞御答迄如此御座候猶永日之

期時候恐々謹言

公

正月十八日

右源二

乾介様

尙／＼未御腫物もさつはりと不被成候由御難義と奉察候しかな
から次第に宜敷は御坐候由益次第によろしと奉察候御入湯之御様
子被仰下大に安心仕候此方にて毎日祈念仕候去冬申上候所御答
扱々毎々御執心甚御目付感心仕候迎も委敷事は尊顔ならては相叶
不申當春に相成候ては于誠晝夜わかち無御座殊に當月は社用例年
神用日待などは今夕より一夕はさめにては相すみ不申二三夕もつ
ゝけ可申積り御坐候何夜つめ申共晝少も休息も相成不申追番頭
方も段々に相まし下方伊塲其外追々段々相まし難有つらきやう御

座候得共彼形もとくも無物に御坐候間つかれる物も無御座此間も
しせんと心も形も不老不死の事なにとやらあらはれ候やうに御坐
候皆々甚感心に御坐候今日も甚急大らん筆御尊免委敷は追々可申
述候以上

二

先月十六日當月朔日出之御書同今日相達忝拜見仕候先以御機嫌
能被成御坐珍重不斜奉存候しかなから未御腫物さつはり不被成
候由御難義と奉存候去ながら今少の御様子程無御快氣と奉存候隨
而當地御宿所様御兩所様益御いきをひよる敷段々御出精にて甚大
慶候彌會も繁榮にて大に面白き時節に相成り申候各様誠に一會も
欠なしに御出にて毎々御尊に御座候且先達ても此度も段々御詠感
心仕候しかし一通のよくをは御はなれ被成候得共たゝ一つのよく

得御はなれ不被成候由御尤に奉存候乍併むりに御くふう不被成何
事もしせんのいきものをしせんの天命に御まかせ被成いかさすと
も時々刻々にころさぬ様に可被成候いきものは無の中に御さ候彼
心計の歌ようのものに

有る無きの中にすむへき無物を

なきと思ふな無心にて

神佛も人の靈も此むちやくちやにて何とやら相はかり可申と奉存
候たゝ明暮難有のみにてなにもかもかんかへ不申たゝ日々に日月
と共に心をたのしむ計に可被成候御奉公も何を被成候とも日月の
ためと思召よき事御座候はゝ日月とともに悦ひ悪ころをさり候
得はあしき事有ときはまたよき事のこやしと思召被成候得は是も

またたのしみに相成可申候一切天にまかせ候得は苦に成事善惡と
もに無御座候苦成不申候得はあどは樂みより外に何も無御座候返
くも御まかせ可被成候めてたくかしこ

閏 正月十二日夜四つ時調

右源 二

乾介様

三 尙々時候御いとひ御心なく御いれの出ぬよう御暮可被成候以上
二月四日出之尊札同十七日に相達し忝奉拜見候先以春暖相増し候
處益御機嫌よく殊に御腫物もさつはりと御全快被爲成御出勤被爲
成候由目出度珍重不斜御事に奉存候隨而當地御宿元御兩君様い
よく御いきをひ宜敷御暮被成次に小子義も彌次第にはつし世は
敷候得共御影にて相勤居申候乍惶尊慮安思召可被下候扱又段々御

執行口御歌拜見仕緒々令感入候殊に御目付重々感心仕於小子も甚
 以大慶仕候此方におゐても御連中追々相ましも申殊にいろ／＼妙
 成事も御座候得共一々申上候も難筆盡彌以天地はいき物に候得は
 うたかいをはなれ執行仕候得は難有事は天地にみち候得は何ほと
 の事御座候共此無中より君も我もあらはれ候得はやまひくらしいの
 物其場にてなをり候とも是らをまたふしきにおもふは重々まよひ
 也たゝ何事も取ちかへにて生を死と思ひ死を生とおもふこそ氣毒
 成次第也其はけは日月天照大神様又は佛などを死物と心得候ゆへ
 に彼かけの命をゝしみ本体の生物斗の心をころす也心こそいき物
 也心をのければ彼死人斗相成申候一切取違多し段々彼形斗御出家
 たちに相咄候處彼大師其外の佛生物と申事を初而聞彌成佛うたか

いなしと被申人多御座候委敷事は筆にて難盡申候毎々急亂筆心斗
 申述候あなかしこ

二月廿五日

右源二

同十九日晚少すきに調

乾介様

尙／＼申上候迄も無御坐候得共大事のいき物をころさぬやういた
 めぬやうに被成候はゝ我いき物も一たひなれは御ましないは爰よ
 り乍惶可仕候以上

五 益御機嫌能御勤被爲成候由珍重不斜御事に奉存候隨而當地御兩方
 様益御機嫌能度々御出にて殊之外御いきをい宜敷今御歸被成候は
 御兩人様人違之様に思召くらしいに御座候何事もしせんの成す處

に御座候得は少も小子手からには無御座段々奇妙之事御坐候中にも五人程婦人の髪のはけ候を一心に神水つけ候處四十日斗に五寸程のび夫を見習ひ壹人二人段々五人程三十日に五寸十日に貳寸なご、申様に相成尤病などは其數甚多し皆天地の誠なす事に御坐候其難有事と小子心中とを相考候に甚恐入御事に御坐候中々左様の場所には無御坐しかなからみな是其人々の誠の處より天地の誠の生物をよひ出と奉存候叶はぬ事少も無こそあまりもつたいなき御事に奉存候申上度御事は山々御座候得共愚筆にては廻り兼申候追々はつし候事當春より去年とは大違に御座候何分秋までに御歸被成候は、積る御咄可申述候毎々指急き亂筆早々筆を留候恐々謹言

四月廿二日調

黒住右源二

石尾乾介様

七 秋暑未嚴敷御座候處益御機嫌よく御出勤被爲成候由珍重不斜御事奉存候隨而當地御宿元皆様彌御機嫌よく被成御坐次に下拙も御同意に相暮居申候此段御安意思召可被爲下候此方御連中も益御出精にて御坐候御執行口申上度奉存候得共逆も筆にて廻り不申追々奉拜顔萬端可申上候右者時候御見舞旁如此御座候恐惶謹言

八月十六日

黒住右源二

石尾乾介様

追而申上候申上候迄も無御座候得共彼信心は御心に年のより被成ぬやう萬事日月に打まかせ何までも小供のこゝろを御はなれ不被

成日月様を恐なからをやさまとおもひ形の事を御忘れ被成心はかりと思召御暮被成候はしせんと思召候はあらはれ可申と奉存候委敷は御尊顔にて可申述候以上

文政六年

一六

重高に相成候間略々御尊免可被下候

石尾乾介様

黒住右源二

一筆啓上仕候先以御道中無滞御機嫌能定而御着府被爲成候哉と奉大賀候已來益御機嫌能御出勤被爲成候哉と奉珍重候隨而當地御宿初小子迄無異相暮居申候乍惶御休意可被下候先達而は雄次様もまことにあふなき様之處を至極御仕合宜敷御立迄にはさつはりと被

致勇敷此上もなき結構にて御座候定而此書御元へ相届候迄には御着と奉存候御直に御聞可被成候少々御饒別は仕置候其後彌はけ敷かうしやく出候得共何を申あげ候やうも無御座さりながら此間會に出候中に

生と死と有と無と此四つの道わすれ被成候事まこと〜至而嚴敷らいのこことく大音にてしせんとはつし候皆々土肥を始不殘陰氣くしけ居申候しれた事に候得共此處御勤可被成候委細は追々〜申上候以上

三月二日調

右源二

乾介様

尙々時候御いと被爲成御機嫌よく御出勤可被成候又追申上候

彼四つ道はなれ候處より別紙に一首御覽可被下候

六

一五七

追啓

此間不斗うかみ申候まゝ御覽に入申上候

有無の山生死の海をこへぬれば

爰そ安樂世界なるらん

此所中ノ未だ勤りは不仕候得共しせん心にかみ候まゝ申上候是目つけの第一と奉存候

二

畧御尊免可被下候

石尾乾介様

黒住右源二

尊館無異

先月十八日御調御書同廿八日夕七島會頂戴忝拜見仕候先以向畧之

時分御座候得共彌御機嫌能御勤被成候由珍重不斜難有奉存候古田御氏も益勢よく御勤被成候由重々難有奉存候隨而當地御屋敷御二人様共殊之外御機けんよく被爲在候其外右御連中小子も無異に不相替世話敷相勤居申候此段御尊意易く思召可被爲下候御紙面之趣毎々感心仕候小子も次第に世話敷今日も社にて此書面も鳥渡相調候間甚亂筆に御坐候得共少々申上候只今於神前御拜中に一首

千早振神の生出す生の子よ

おやの心をいたましましむるな

誠に常に承知仕ながら我物と思ひ天より生付られし生物をいたため廣大成不生ふめつの樂を失し世の憐さかきりなきをしき事也たゝ何事も天にまかせ候事親にしたがう心なり小子執行者天命次第行

七

も歸るも生も死も天地なれば少しも苦に成事無御坐た、打まかせ
日用を暮候得は又しせんごをしへも天より御坐候是を以世を渡時
はた、樂みより外は無御坐候委敷は追々申上候甚急き亂筆御尊免
可爲下候恐々謹言

五月朔日

右源二

乾介様

尙、次第に夏きに相成候間諸事御用捨第一御勤可被成候以上

一四 度々御念書難有拜見仕候益御機嫌能御勤被爲成候由疊重目出度難
有奉存候隨而當地皆々様益御機嫌能毎度、御入來次に小子も無
異に相暮居申候其外御連中も皆々御出精に御坐候此段御安意思召
可被爲下候道の事も益繁榮の趣御坐候此段御悦ひ可被爲下候妙は

彌あらはれ候得共此妙も逆も天地の妙也我妙に御坐なく候間皆天
地の妙也我をはなれ候事のみ執行仕候病の事は少も苦に成る物に
無御坐何事も天に御まかせ被成候は、萬事たのしみの外は無御坐
一切をしへはてんよりおこる也其をしへ請て日々樂暮こそ信心也
まことに、古田御氏様尊君様のやうに一心に被成御坐候得は未
樂敷御事に御坐候しかなから形有中に事のたると申事は無御坐
候間一切望をはなれ可被成候のそみをはなる、時はたらぬ事は有
へからす申上度事は山、御坐候得共愚筆には及かたく先は荒
く、如斯御坐候恐々謹言

六月朔日認

右源二

乾介様

尙／＼當年近年の暑さ御座候随分／＼時候御いとる御勤可被成候
又々以上

一〇八

略々御尊免可被下候

六月十七日出同廿四日尊札當月九日相届難有拜見仕候先以秋暑之
時分彌以御機嫌能被成御勤候由恐悦至極に奉存候隨而當地尊家御
二方様益御機けんよく被成御坐其外例之御連中小子義も御同意に
相暮居申候乍恐御尊意安く思召可被下候小子義も先達而は好事か
悪事かはそんし不申候得共甚相勝れ不申段々に相伺候處彌形は無
御座との神圍にて御坐候得共講釋共は一段宜敷罷成候所先月廿九
日より又形共よろ敷相成此節はさつはりと仕候惣御連中に大に御
心配をかけ甚恐入候得共御執行之御爲には相成居申候于誠有無生

死のばを直に相勤候間跡は大に宜敷御座候其外にも段々に妙者御
座候得共夫は尊顔ならては難申盡彌天命開運に相違無御座萬事天
に打まかせ其跡は御樂可被成候右は御二通御答迄如此御坐候恐惶
謹言

七月十二日調

黒住右源次

九九

古田雄次郎様

黒住右源二

石尾 乾介様

任幸便に一筆啓上仕候先以其御地 御兩所様御機嫌能被爲成御座
恐悦至極に奉存候隨而當地御兩家皆様御機嫌よく被爲成御座次に
小子義も御同意に相暮居申候此段御尊意安く思召可被下候先達而
十一日相調十二日指出候定而相届御一覽被爲下候哉と奉存候小子

義も彌さつはりと仕甚甘き至而好執行仕申候萬事委敷は追く可
申述候恐惶謹言

七月十五日

黒住右源二

古田雄次郎様

石尾乾介様

尙々彌時候御るとい御勤可被爲下候早々以上

追啓申上候先日病中に居申候節早朝に右近殿見廻に被參其時に
御同人一首御持參被成歌に

天つちの道に迷ぬ我心

身に歸りてはまたまよひけり

致され候小子少心に叶不申則時に小子一首

天つちの道に迷ぬ心こそ

生れす死ぬこゝろなりけれ

仕候處甚御同人感心にて片山氏えも御相談御座候處是又感心御座
候其まゝひやうく致され會宅の懸物と相成甚をか敷事に御座候外
の事は一向つまり不申候得共道の方歌なら何にても御直し可申候
處彌感心に御座候御同人は其歌も段々に幾日も御考の上にて御持
參の處言の下に直に仕候其外にも色々面白事段々御座候以上

一五

略々御尊免

一肇啓上仕候先以其御地 尊公様益御機嫌能被成御座珍重不斜御
事奉存候隨而當地宿元 御兩方様彌以御勇敷被成御座候次に小子
並に右連中不殘御同意に相暮居申候乍恐御尊慮安く思召可被爲下

候然者彼道も彌以繁榮仕難有御事に奉存候此段御歡可被下候奇妙者天地之奇妙とそんし候得共小子なす處斗にヶ様に妙あらはれ候事難有奉存候夫に引替萬事之行十か一つも勤不申候と時にはせまる位に御座候さりなから我心も我身も天地の物なれは何事もしせんのかなす所也とそんし心をやしない相暮居申候委敷御事は尊顔ならては難申盡先は荒く申留候恐々謹言

八月十五日

右源二

乾介様

尙々時候御いとい御出勤可被爲下候以上

三 毎度御念書難有奉拜見候如仰寒冷甚敷御坐候處彌御機嫌よく被爲成御出勤目出度不斜御事に奉存候隨而當地御屋敷御兩所様益御機

嫌能被爲成御座次に右御連中小子不相替御暮居申候此段御尊意安く思召可被爲下候且道之方も彌榮候様子に御座候餘り大に廣候様子御座候處彼醫者又はのりくらなど種々の事をこしらへ所々へふれ廻り候よし夫に付きつと仕たる處より段々承候事かすく相聞于誠惡事千里御座候間醫者のりくらすきの人或法華宗など渡に舟とそんし此節色々と申立候と相聞候必御せんきも御座候哉と奉存候得共是迎も皆こしらへ事に御座候間其まに相成様子に御座候しかし少々は何もわけをしらぬ人先見合候而得不參候夫ても中々人は已前よりは大違に御座候是も皆天の御たすけと奉存候中々小子未徳無御座間大に執行の便と相成申候しかし後々は如何様に相成候やら相知れ不申何かも彼まこと一つに相極候間善惡共に御影

と奉存候委敷は追々申上候先は荒々筆を留候恐惶謹言

十一月十五日

黒住右源二

石尾乾介様

九 一筆啓上仕候先以寒冷之節益御堅康に被爲成御座珍重不斜御事奉
 存候御冷は如何に御座候や此方にて毎度宜敷執行仕候隨當地御宿
 初下拙御同様に相暮居申候乍惶此段御安意思召可被下候且此靈符
 よろ敷祈念仕候彼形之爲に御頂戴不被成御心のために御頂戴可被
 成候御心さへしせんと御開被成候は、形之上はどにもかくにもに
 御座候此節爰に被成御座候は、今日のかうしやくまことに難有出
 まことに、此世界我心のうち有とゆうやうの事うたかい無御座
 處出候へ共是を聞人壹人もなしさりなから何ぞなくしせんと一躰

と成皆々様彌御出精御しうしんに御座候委敷は追々申上候先は
 荒々可申述候

十二月二日調

右源二

乾介様

畧御尊免可被爲下候

三三六

石尾乾介様

黒住右源二

尊答無異

先月十七日出之御尊書同廿八日到來難有拜見仕候時分柄寒氣甚敷
 御座候處彌御機嫌よく被爲成御出勤被爲成候由珍重不斜御事に奉
 存候隨而當地御屋敷御二方様益御機嫌よく被成御座右御連中小子
 共御同意に相暮居申候此段御尊意安く思召可被爲下候扱少々御不

快之御様子御難義と奉遠察候右に付御神園に而御入湯被遊候由定而御快方被爲成候哉と奉存候此方に而も宜敷神前におゐて御全快御心願可仕候彌御用捨可被爲成候且又當小子道も何とやら追／＼發向と奉存候其本は小子心之内に御座候只今迄迎も皆人見られ候處は餘透も無御座候得共今考へ見候得は執行甚たるく御座候此節は毎朝七ツ過にはおき水をあひ夫れより中仙道の宮今村宮え參詣仕夫より罷歸小子神前に而執行仕日の出待御拜仕候處甚難有事は彌心持宜敷彌以信心仕候存寄に相成候是も先達而も申上候通の惡人出色々の噂仕候と承候間是天の我に執行可仕と申事御をしへど奉存候故々様に相始候彼流言も其まゝに消候やと相聞候たとへ人は何と申候共我をすて、本を能勤候得は心彌冷敷御座候先達の御

詠歌甚感心仕候面白御事に奉存候仰の通に御座候信の人の住かはそこに御座候去なから信うすき人は其中に得すみ不申夫故に根の國或地獄に落候と奉存候信の中にさへ住候得は外に少も苦に成事無御座候乍去是を皆人きらひ候て皆地獄に落候まことに憐成次第也かく申小子すら地獄すき成候て困居申候先達のたつた一つの信斗さへ相成候得共やゝもすれはいふて見すく相成候右に付只今一首

極樂としりつゝ爰を行過て

地獄におつる心かなしき

能く考へ見るに思はずしらす形斗に流れ本の住かを忘れ候少に而もたもち度は無の中の住か也委敷は追々先は御答迄如斯御座候

早々以上

110

十二月二日朔日に調

右源二

乾介様

尙々時候御るとい御出勤被爲成可被下候彌御用捨奉希候又々以上

一七

略々御尊免可被下候

石尾乾介様

黒住右源二

尊節無異

甚寒之節に御座候處先以御地尊君様益御機けんよく被爲成御出勤候由目出度難有奉存候隨而當地御屋敷御二方様初右御連中小子共御同意に相暮居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候且又道之義も何とやら御影にて次第に廣り候様に思はれ候一節之流言も此節は

何之沙汰も無御座候夫に付彌信心相増し難事段々出來候中にも此節は朝七ツ時頃よりおき水をあひ今村中仙道へ參歸候て祓貳百斗も執行仕と夜明相成候先日も不斗心に思ふやう此勢ひ候はは五社參も相成候と奉存候七ツの鐘を聞夫よりをき夫より水などあひそろく身拵致し先一番に今村へ參詣いたし夫より中仙道へ參り其まゝ一宮へ參候得其中々夜明不申又宮内へ參夫より庭瀬へ廻大神宮へ參詣仕候得其中々夜も明不申夫より直に罷歸候て中々夜明不申彼祓貳百斗も執行仕候得はやうく夜明に相成候我身なから今にふしきにそんし奉候何分半時迄はかゝり不申毎度五社參候得は一日懸候處半時程には參歸候しかし惡申せは何とか申も相知れ不申萬事夫に順し甚勢ひよろ敷難有御事に御座候段々に申上度御

事は山々御座候得共迎も尊顔ならては難及奉存候毎度〱指急き
早々如斯御坐候恐惶謹言

十二月十二日調

黒住右源次

石尾乾介様

尙〱時こう御ゐごい御出勤可被遊候干誠當年は爰元共は近來之
寒に御座候彌以御用捨之程希奉り候以上

文政七年

一八

石尾乾介様

黒住右源二

要用無異

改年之御吉慶重疊申納候先以 尊公様倍御機嫌能被遊御越年恐悅

至極に奉存候隨而當地尊家 御兩所様益御機嫌能御嘉壽被遊次に
右御連中小子共御同意に嘉年仕候乍恐御尊意安く思召可被爲下候
干誠〱年内にも毎度〱御念書難有毎度〱奉感心候此節は小
子も干誠〱夜る晝の別ち無御座しかし難有事段々出候此間も命
心のまゝと申事傳受可仕と申事申出貴賤の隔も無御座感心に御座
候得共是は迎も筆にては叶不申最早御歸國今少に相成候間其節御
咄申上候甚急大亂筆誠に御祝詞迄如此に御座候尙期永日之時候恐
惶謹言

正月十五日

右源二

乾介様

尙〱今少の寒さに御座候間御るとい遊はし御勤可被爲下候早々

以上

四九九

毎度御尊書難有奉拜見候彌御機嫌よく被爲成御出勤候由恐悦至極に奉存候于誠御繁榮之御様子奉承候益御勇敷と難有奉存候尾上も御いきをひよろ敷御勤被成候由是又難有奉存候古田御氏者此書狀相達候迄には御道中と奉存候追付御様子承候と相樂し居申候此度者尾上氏えも書狀遣し不申乍恐宜敷御傳聲奉頼上候外に西村氏え御序も御座候ははよろ敷御頼申上候隨而當地尊家御二方様益御機嫌能被成御座其外右御連中小子も御同意に相暮居申候此段御尊意易く思召可被下候右之道もまた大方本のくらひに相成申候色々之邪物も次第にしつまり候様に奉存候此後者何もうたかいは有間敷と奉存候今に色々と申候は彼寺計に御座候しかし何と申ても届

不申彌大供共には日蓮宗多く御座候榮三郎共寺へ參段々に懸合候得共寺彌心斗いれ候得共いたし方無御座候而返すくも笑敷事斗御座候先方は迄無理旦那をしへ候間此度大難儀に御座候しかし此方先方之ぬけをとかめず此方の清所ばかり打ぬき候得はよろ敷御座候上へぬけては先方つまらず其まゝては是迄の過言つまらぬと相見へ氣毒ながら致方無御座候小子心は人之所とては御座なく自心の心か思ふ様にならぬか悪しくとそんし苦しみ候に人をいためる心は少しも無御座候此上は何事も天命次第に仕候委敷は追々申上候折節指急き荒々如斯御座候恐惶謹言

九月朔日社にて認

黒住左京

石尾乾介様

尙々時候御るとひ御出勤可被爲下候以上

三九

毎度御念書難有奉拜見候古田様も先月廿一日に無滞御歸にて廿二日會には御出にて尊君様御様子承大慶奉存候其節兼而御頼申上置候品御越し被下誠に重寶成御品にて長く賞翫仕候隨而當地尊家御二方様初右御連中小子共無異相暮居申候此段御尊意安く思召可被爲下候道も先ぬるみ合にて御座候追々ははつし候哉と奉存候夫も天命次第にて少も望みは無御座まことにくうき世のさま可笑敷事斗にて何もかも小供のまゝ事の様におもはれあはふらしゆうて相成不申候我もはや半を過申候も此まゝにても高天の原へ歸る事近く成とおもへは夫もよし此まゝにてもよしとおもへはたゝ何事も無理の無やうにと日を送るより外に樂は無御座候今一首

悦ひはかなしむうらと聞からに

もふよろこはすかなしみもせず

御一笑く今日も甚世は敷御坐候間尾上氏西村へも乍恐宜敷御傳聲奉頼上候恐々謹言

十月朔日

左京

乾介様

尙々次第寒さに相成候間御いとひ御出勤可被成候

二

略々御尊免可被下候

(宛名切抜)

黒住左京

玉下無事

尙々次第寒氣相増し候間萬事御用捨可被成候以上

當月朔日之尊書同十二日相届難有拜見仕候寒冷彌増に御座候處益御機嫌能被爲成御出勤珍重不斜御事に奉存候又又御祓貳百五十度御越し則神納仕候隨而當地尊家皆様初右御連中小子共御同意に相暮居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候古田御氏も彌御出精に御坐候大分三之夕御會も賑々敷相成申候道之流言も折合候や此節何之沙汰も無御坐候毎度〱御文面之趣御一心感仕候小子執行目を付候處は未勤り不申候宙にぶらりにてつまり不申候追々者今の所にて心のまゝに執行仕度奉存候有無をはなるゝ所有ははなれば追々ははなればはなれもいたし候やそんし奉候得共無をはなるゝ事申々てんのたすけなくては我力にては相叶不申候此處に大に病ひ居申候口釋の時斗は何とやら有無共にはなれ候其あとは元之通御

座候折節指急き先は筆留候恐惶謹言

十月十三日

左京

乾介様

四二 尙々此度も御祓貳百七十度御越し難有神納仕候又少々申上候有無をはなるれば直に神也佛也形のうへにて相考へ候得は何事も貴賤ともに我心にてくはんするにかく侍りぬ

思ふ事叶はねはこそうき世なれと

思ひわくるそさどり成るらん

此通りの様に思はれ候此歌の所をはなれてか道也委敷は追〱

申上候

當月朔日御調之御書同十四日之夕大供龜次會にて頂戴仕益御機嫌

能御様子難有奉存候尾上西村氏も御同様に御出勤被致候由重々難有奉存候隨而當地 尊家皆様外御連中皆々小子共無異相暮居申候乍恐尊慮易く思召可被爲下候且道も先音なしに相成そろ／＼と又芽ぐみかけ候様に奉存候先達而も申上候通人はともかくも我執行思ふ様に得不仕候甚残念に奉存候得共是も又時にしたかうより外は無御座と奉存候于誠／＼我／＼敷之者に廣大成天より御影を請其百が壹つも得勤不申候只形之上の禁だけやう／＼仕候しかし先達而是斗は未不申上候得共無を少しはなれ候事も御座候て姿をはなれて生物の處我心だけは勤さへ候得は相違無御座天の御惠を請申候此事文通にては不申候此義は卯三郎榮三郎是も詞の上相咄し申候其外は未はなし不申候追／＼は此事も尊君様古田御氏などへ

は御咄可申先は右御答如斯御座候恐惶謹言

霜月十五日調

黒住

石尾様

三一

度々に御坐候得共此手紙宜敷御頼申上候

一筆啓上仕候甚寒之節御坐候得共益御機嫌よく被成御出勤候由珍重奉賀候于誠度々に御念書殊に御事多之御中に度々御祓難有奉神納候隨而當地尊家初右御連中小子共御同意に相暮居申候此段御尊意安思召可爲下候彼道の事も流言は于誠音も香も無御座所々に何とやら却而今迄のうら相聞申候寺などには大耻入とそんし甚氣毒に奉存候今迄之難道のためには廣り口之やうに奉存候しかし思ふやうに勤參り不申候天よりは難有道を得なから行つたなきこそ心

外に御座候此間も何十年と申執行仕候神道者など段々に極意とする所ふしん先方より出し候所口の下苔甚先方感心にて却而彌極意をは此方より傳受いたし候其外佛道にても段々其通の事御座候かほごまで明に天よりをしへを請なから身の勤其割に相成不申候委敷は追々申上候年内も今少し御座候年明目出度可申述候恐惶謹言

極月十五日

黒住左京

石乾介様

尙々時候御るとい御出勤可被爲下候以上

文政九年

略々御尊免可被爲下候

一筆啓上仕候先達而御道中無御滞御着府被爲成候由殊に至而御仕合宜敷由重々目出度奉存候已來益御機嫌よく御出勤被爲成候旨恐悦至極に奉存候隨而當地御屋敷 御兩方様益勢よろ敷被成御座候右御連中小子共御同然に相暮居申候乍恐此段御休意思召可被爲下候道之事御尋被爲下次第々々に勢ひよく候此上は小子行に御座候尤天の時にも寄候哉と奉存候しかし未小子行御影の割には引合不申候なりたけ信心仕度と奉存候迎も自力には參り不申候てんの御助力を御互に祈り可申候一つとして我なす事は無御座候てんの産給ふ我まことの玉をすてよその寶を尋しとろさ

古歌に

中／＼に人さと遠く成にけり

三四

あまり深山の奥をたつねて

と御座候得は皆々ちへと心得て次第／＼に神や佛に遠く成事斗執
行致と奉存候其邪ちを捨ててんの産給ふ玉かゞみにかゝる事近く
成事と奉存候其處を相考へ候得は小子のやう成生付よりの無智も
宜敷と奉存候委敷は追／＼可申上候恐惶謹言

四月十五日調

黒住左京

石尾乾介様

尙／＼時候御いとひ御出勤可被爲成候以上

二三

又／＼申上候十六日出尊札相達難有拜見仕候御心さし重々感心
仕候彌其所を御勤可被成候古田も此節は大方先年に歸られ候ま

しない此道の外は何事もやくに立ぬと御申にて御座候甚可笑敷

御事に御座候しかし是は御内内に御座候又／＼以上

度々御念書被遣難有拜見仕候先以其御地 尊君様益御機けんよく
御出務被爲成候由珍重不斜御事に奉存候御文面之趣毎／＼感心仕
候隨而尊家皆様御機嫌能小子皆々御同意に相暮し居申候乍恐此段
御尊意易く思召可被爲下候且道も追／＼面白様子に相成申候乍末
御文面之通にては彌御繁榮と奉存候何事も／＼一切天に御任被成
候は、誠に誠に不思議に參候物と奉存候いよ／＼其所を御ゆるし
被成間敷候委敷御事は追／＼申上候先は荒／＼如斯御座候恐惶謹
言

五月二日

黒住左京
(花押)

三五

石尾乾介様

黒住左京

又々申上候度毎に御被御越神納仕候尊君様に御座候間御武運御長久に相備へ可申候乍末申上候當月二日には甚人間違候て大に御無音申上候定而御待被爲下候やと奉存候以上

當月二日出尊札同十二日に相届拜見仕候先以暑之時分其御地 尊公様益御機嫌よく被成御出勤候由恐悦奉存候爰元尊家御兩尊様益御機けんよく御光駕被爲下御勢ひ宜敷御休意可被遊候右連中小子各御同様に居申候乍恐御尊意易く思召可被爲下候志津摩殿も昨十四日に御着被成候右兩人も甚違者にて罷歸申候先達も御申越し被遊候趣申聞候所兩人も甚残念御座候吳々も宜敷申上吳候様申出候道之義も先追々宜敷方には御座候古田も近比はかけなしに御出に

御座候難有事は段々に彌増に御座候一切天命と奉存候我行を專一と勤候得は何とやら道は自然の道に御座候まゝ無理に心を苦むるにも及不申たゝ難有事斗くはんし候得は次第〱にをしへは天より起き候哉とそんし奉候爲指事も無御座候得共右尊答迄如斯御座恐惶謹言

六月十五日

左京

乾介様

尙々當年は近來之暑にて御座候定而御地も左様と奉察候随分〱御用捨專一と奉存候今日も甚世話敷大亂筆御尊免可被下候

〱

略〱御免可被爲下候

石尾乾介様

黒住宗忠

毎度尊札難有拜見仕候彌甚暑之節御機嫌能被爲成御出勤候由珍重不斜御事に奉存候隨而當地 御兩尊様益御機けんよく被成御座次小子皆々御同意に相暮居申候乍恐此段御尊意安く思召可被遣候御内々申上候古田氏も先年之通に被成候一節大にまん心にて甚つまらぬ事に御座候所不思義に又元之通に相成候やいなや病も宜敷何もかも至而宜敷御座候小子はしらぬ顔にて居申候可笑敷次第に御座候其外濱野今村五郎左衛門初古連中至而一心出殊之外面白次第に御座候其外餘程開け口之様に何とやら思はれ候小子宮にて夢を見候中に誠我一人座して居候所たとへは大小のくちなは其數何程という事不知色々我をせめる是を祓はんとすれども中／＼致方

手足をまきのとをまき或は大き紅ひのしたを出しのまんどすにげんどすれと一面不殘野も山も大小のくちなは斗也能／＼見れば兼而大じとおもふ子や家内其外金銀一切望む物不殘蛇也中にも大將と見へ候蛇は己か形也我なからあきればて分別につきはて候所に不斗 天照大神様を思ひ出し一心に念し丸まかせに致し候所夢の覺たる如くに皆々今迄恐敷と思し物不殘又常の通に家内子共金銀ざいほう誠の寶に相成候是に付は心を矢ひ天神に奉まかせ候得は皆々我心のやしないと相成候夢は迷ひ出候と申候尤迷ひの處には候得共甚執行難有思ひ皆々え相咄し候所皆々難有かり被申候今日も世話敷殊に病人多にて此節甚所々より申來大困り大亂筆御考御覽可被遣候恐惶謹言

七月朔日

乾介様

左京

尙々今日は久しふり好雨ふり大に涼敷相成候是迄は近來の暑にて
皆々難義御座候得共最早此雨にて是迄の様成事は相成間敷と奉存
候随分御用捨專一と奉存候以上

二六

一筆啓上仕候秋冷相催候處先以尊君様益御機嫌能御出勤被遊候由
珍重不過之奉存候隨而當地尊家皆様彌御機けんよく次に小子皆々
御同意相暮居申候乍恐尊意易く思召可被下候毎度〴〵御念書感覽
奉り候先便には御無音申上候御聞可被成哉茶屋町長次郎死去仕則
當月朔日に御座候いやはや色々と相成申候中々何もかもあてに相成
不申候しかしよき執行と奉存候道はか様の事皆執行と奉存候是に

付御咄も御座候得共逆も筆にては及不申候少道の心を申上候たご
へは

好男子一人有是に一人の女を合夫婦とすると二人と成り是に子五
人出来是に又よめむこを取時は親子共には十二人也是に五人つゝ
孫子出来また廿五人也合て三十七人も不殘繁昌いたし長壽いたす
物は一人もなし萬一御座候處其三十七人の身の上我一人に引請考
へ候て苦み候得は或痲瘡また産はやり病子供の出来不出来不殘身
に引請誠夜も日も明不申是火宅と佛道にも申候は爰を申か出家親
兄弟をすて、一人になり天下を家として執行致す人千人に一人も
さどる人なし爰を相考へ候得は道は我一人にて行より外なし何程
におもひ候ても致し方無我一人の心すら中々千人に一人も行ぬか

道の常也しかし難有事は我も天地の子也我産子も天地の子也天地に打まかせ天地のをしへをうけておしへ誠一つに行時は善も悪も生も死も執行也難有事は此國の自然の天のをしへうくる事他の國よりは格別の事と奉存候何事も天命と奉存候天の道を行い其上の事は少も／＼若に成事無御座候皆我物と思ひ迷に入事恐敷事也天の子也少も心も心にはつる事無時は是則神也形は皆にこり也餘長だんきは紙のつひへ先筆を留候以上

八月十六日

黒住 左京

石尾 乾介様

尙々次第に冷氣に相成候間萬事御用捨專一と奉存候以上

ノ

略ノ御尊免可被爲下候

石尾 乾介様

黒住 左京

尊箱無異

一筆啓上仕候時分柄冷氣彌増候所益御機嫌能被成御出勤奉恐悅候于誠先達而は御念書趣 若殿様御儀奉恐入何と申上候様も無御座御事に奉存候夫に付御歸國も近寄候由偕々何共申上候様も無御座候しかし是も世の有様に候間先達も仰被下候通り一切當に成物は無御座夫故の道に御座候於御國は御留主 御兩君様次に小子御同意に相暮居申候此段御尊意安く思召可被下候御歸國も被爲成候はば積御咄可申上候爰か道之所に御座候一切有物は無もの也誠に貴賤の隔なく是をはなるれは生も無死もなく尊も賤もなし其所明り入候得は天地皆我物と相成り可申候折節今日も甚世話敷先は右尊

答迄如是御座候恐惶謹言

一四

九月十五日晩

宗 忠

石 尾 様

尙々時候御のとひ可被成候様奉存候以上

三三

へ

畧へ御高免可被爲下候

石尾乾介様

黒住左京

尊 答

無 事

先月十六日出尊札被遣難有奉拜見候時分柄寒冷彌増に御座候處先
以 尊君様益御機嫌能被成御座目出度珍重不斜御事奉存候隨而當
地 尊家皆様右御連士小子皆々御同意に相暮居申候乍憚御尊意安
く思召可被爲下候毎度道の事御尋被遣先折合居申候古田氏卯三郎

など古連以前に立もごり其外人ましも不仕候得共一心は立候やと
奉存候兎角何事も執行か大事と奉存候人はともあれかくもあれ我
執行大切に致と奉存候しかし口釋は甚宜敷皆々悦び申候先日も道

歌に

こゝに來て口ばかりにてとく道を

みゝはかりにてきゝ給へひと

といたし候心は己か心をはなれてとく時は口はかり也其時何とな
く無心の所に口に出る也是則天の云しむる也又きく人もみゝ斗に
てきゝ給はゝ誠に一昧也天地一昧成時は外に我といふものなし其
時は天心也少にても心あらは迷出候と奉存候かへすゝも何事も
天地に打まかせ望をはなれ執行仕度と奉存候爲指御事無御座候得

一五

共右尊答迄如斯御座候恐惶謹言

三

十一月十六日出

黒住左京

石尾乾介様

尙々次第に甚寒に相成候間萬事御用捨專一に可被遊候以上

三

尙々申上候龜次に御序も御座候は、宜敷被仰付可被下候先達も

預文通に候得共此度も無沙汰仕候此段宜御願ひ奉申上候

一筆啓上仕候甚寒之節先以其御地 尊君様益御機嫌能被爲成御出
勤候由珍重不斜御事に奉存候隨而當地 尊家御兩尊様彌御機嫌よ
く御光駕被遣難有奉存候小子皆々御同意に相暮居申候乍惶尊慮易
く思召可被爲下候且又道も一節餘ほど勢ひ宜敷來春共は大に開け
候哉と樂み居申候所定而御聞も被爲成候哉と奉存候土肥家存も寄

ぬ事出來仕候只今は小子もたとへ今何ほどの事出來ても少も一心
のござする事は無御座と存居申候所此度の事には最早道も是切と
存甚残念に命は少もをしむ事は無御座と奉存候得共忝も天照大神
の御心をいため日神の御徳をくりますかいか成惡魔のつよき世の
中かと大ふさぎ仕候所又思ひ返候得は邪は正の本と奉存候世間に
申處と小子今行の所とは天地の相違也去りなから昔の大徳の人も
皆色々の事有物と思ひ又一心の人々とも談したとへか様の事とて
もかく邪魔に成ぬやうにと談し執行仕候池田家も中々少も御一心
うこき不申是には大に安心仕候若是か御一心替り候は、當事御家
中丸はつれ候と奉存候得共彌是迄より御懇意被成下誠に安心仕候
御同人左様に御座候得は外様も少もおもてに御か、はり無御座候

三

申上度事山々御座候得共迎も難筆紙盡候餘書は來陽目出度可申上候恐惶謹言

三六

極月廿七日認

黒住左京

石尾乾介様

尙々時候御るとい御出勤可被遊候以上

二七

石尾乾介様

黒住左京

要用無異

追啓申上候當月朔日御認之御書同十二日相届難有奉拜見候彌御機嫌能被成御勤候由奉恐壽候且毎度く道之事御尋被遣難有御執心感心仕候先達而申上候通道は小子道には無御座則乍恐天照大神様の御道をとき奉り候を兎角小子に目を付られ古印の様に心の病と

成候間兎角形にも病出候難有事小子心にうかみ候ても御咄申事相成不申しかしましなひは宜敷候由會の先へ見へ又跡へ見へましなひ斗にて被歸候はや利程は相すみ申候様に被思候哉と奉存候しかし中く未夢に道を聞れ候様成物にて未目の覺ぬのと奉存候甚氣毒に奉存候此義は至而御内々被成可被下候

一此節小子相務候處申上候

今夕は鈴木様明夕は辰巳新田平六方十五日は日待同六日は大供山田屋同十七日は村内同十八日は七島同十九日は西大寺町島屋仁兵衛廿日は鉄屋廿一日は茶屋町廿二日は奥内同廿三日は石尾様同四日は大供下野町岡屋源兵衛同廿五日同廿六日瓦町油屋廿七日は村同八日は花屋と申候様成事にて夜前も一昨夕も不殘大方毎夕會御

三九

座候人數は大勢には無御座と申とも一切を集候得は大勢に罷成申候委敷は追々申上候又々以上

文政十年

二二七 大坂より之尊書正月晦日出先月十八日に相達忝拜見仕候御道中も至極之御仕合宜定而其後も無滞御着府被爲成候哉と奉存候此方にも明暮祈奉候先達而も申上候通りたとへ千里御隔たり候共同日月にて御座候間御一心は同御事に御座候隨而當地御屋敷皆様彌御機嫌能次に小子皆々御同意に相暮し居申候乍惶此段御尊意易く思召可被爲下候猶委敷御事は藤四郎様より御聞可被爲下候恐惶謹言

三月朔日

黒住左京

(切抜)様

尙々時候御るとひ御機けんよく御出勤可被爲成候

六〇 先月廿日出尊札相達し難有奉拜見候先以甚暑之時分益 尊君様益御機嫌能被爲成御出務候由目出度奉珍壽候隨而當地尊家皆様御初小子御同意に相暮居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候誠に毎度御文面殊に外々よりも承り候所萬事御奉公御務向誠不思議と申位奇妙也と申御沙汰承り於小子にも無此上難有御立前にも少はかり御餞別かく迄に御用ひ被成候所一偏に天照大神も御感納と奉存候ます々御たるみなく御つとめ可被遊候先は尊答迄如斯御座候恐惶謹言

六月十六日

一 森彦六郎様

黒住 左京

尙々時候御厭ひ御務め（以下不分明）

一三〇

一筆啓上仕候未殘暑甚敷御座候得共先以 尊君様益御機けんよく御出務被成候由珍重不過之奉存候萬事御務向至極思召寄に御叶被成候由目出度此上も無御座御事に御座候しかし何事も乗り參ぬ様にたるまぬやう可被成候道は中を取候か大いと奉存候其中と申か甚六ヶ敷御座候萬事藤四郎様へ御相談可被成候隨而當地 尊家皆様御初右御連中小子方皆々御同意に相暮居申候此段御尊意安く思召可被遣候申上度事も山／＼御座候得共此度は甚多用誠に亂筆如斯御座候恐惶謹言

七月十六日出

黒住 左京

七八

一筆啓上仕候秋冷相催候處先以其御地尊君様益御機けんよく被成御出勤候由目出度珍重不少御事奉存候隨而當地尊家皆様御初小子皆々御同然に相暮居申候毎度御文通之趣奉感心候しかし何事も御ひかへめに被成候方一大事と奉存候萬事すゝむ時は甚あやうき物也何事も身をつゝしむ時は少も苦に成事なしおこる時は必／＼難來事疑ひなしたゝ天命に打まかせ難有一へんに被成候はゝ惡き時なし申上度事も段々御座候得共追付乾介様御出被成候間委敷御聞可被爲下候先すは荒々如斯御座候恐惶謹言

八月十六日出

宗 忠

一 森 様

尙々時候御厭ひ御出務可被遊候以上

122

二九 一筆啓上仕候先以冷氣甚敷御座候處先以

尊君様先達而は御道中も無御滯御着府被遊候哉と奉存候目出度奉存候大坂より御念書難有奉拜見候嘸々其後も彌御仕合宜敷哉と奉察候隨而當地御留主皆様御機けんよく被成御座次に小子も御同意に相暮居申候此段御尊意安く思召可被爲下候誠に先達而は大成御邪魔を申上候宜敷御頼申上候且道も何とやら面白様子に相成居申候先日佐分利も被參是迄之無沙汰段々斷にて殊之外一心出申候誠に不思議成事に御座候其外一統何れもいきをひ宜敷古印も大きに一心出居申候大坂之事御尋被遣神龜今少叶ひ不申參籠之内ゆへと奉存候何事も天命次第と思へは面白き事に御座候委敷は追々申上

候恐惶謹言

十月二日出

黒住左京

石尾乾介様

尙々次第に寒に趣候間萬事御厭御出務可被遊候以上

三七六

一筆啓上仕候冷氣彌増に御座候處先以尊君様益御機けんよく被爲成御出務候由珍重不過之奉存候誠に先達而定而御道中無御滯御着府被遊候哉と奉存候奉恐壽候隨而當地尊家皆様右御連士小子皆々御同意に相暮居申候乍惶御尊意易く思召可被遣候誠に先達而は大に御邪魔物を御頼申上候宜敷御頼申上候道も先折合候内古田も近頃は大に御一心出大に宜敷此節に而は先年之通に御座候其外佐分利淺野も御一心出申候誠に笑敷物に御座候しかし當には仕不申候

123

何事も天命次第と奉存候難有斗に而相暮し居申候神道はいきる事
斗に而宜敷と奉存候佛とはうらはらの事と奉存候是迄は少の取違
に而大成間違御座候何もかも時々刻々に物をいかし候所こそ天照
大神の御道と奉存候此度甚世話敷誠に荒々筆を留候恐惶謹言

十月十六日出

黒住左京

石尾乾介様

尙々次第に寒に相成候間諸事御厭ひ御出務可被遊候

四七

一筆啓上仕候冷氣彌増に御座候處尊君様益御機嫌能被爲成御出務
候由珍重不過之御事に奉存候隨而當地 御留主様御初右御連士小
子皆々御同意に相暮居申候此段御尊意易く思召可被爲下候誠に毎
度御念書殊に龜次より委敷御様子承奉感心候何か御心配大に御座

候處何事も道に御まかせ被成候而御務被成候由其上之事は無御座
候誠に先達ては結構成御茶御恵に預難有賞翫仕候且又來春御歸り
御參宮之御神龜不苦宜敷御座候間御參宮可被遊候何事も青地石尾
に御相談被成候か宜敷と奉存候此度も世話敷大亂筆眞平御免可被
下候恐惶謹言

十月十六日出

黒住左京

一森彦六郎様

尙々次第に寒に相成候間諸事御厭ひ御出務可被遊候

文政十一年

六八

略々御尊免可被下候

(切抜) 様

(御名切抜)

要用無事

一筆啓上仕候先以暖氣彌増に相成候處其御地
 尊君様益御機嫌能被成御出務候由目出度珍重不斜御事に奉存候隨
 而當地尊家皆様御機けんよく被成御座候次に小子方皆々御同然に
 相暮居申候乍恐御尊意易く思召可被爲下候毎度御念書被遣感心仕
 候萬事天命打まかせ御務可被遊候乍恐
 殿様御立も迎も御延引被遊候哉と奉存候左候得は御歸國も秋にも
 御延可成と奉存候しかし何事も御任可被成候藤四郎様も追付御歸
 り可被成と奉存候しかし何事も御任可被成候藤四郎様も追付御歸
 り可被成と奉存候何か委細承度と奉樂候爲指御事も無御座候得共

先は時候御見廻旁々如斯御座候恐惶謹言

三月十六日

黒住左京

一森彦六郎様

尙々時候御厭ひ御出勤可被成候以上

三五

略御尊免可被爲下候

石尾乾介様

黒住左京

(尊館無異)

(破 損) 先以薄暑相成候得共其御地 尊君様益御機嫌能被爲成
 御出務候由目出度御事奉存候且毎度御細書被爲遣難有奉感入候隨
 而當地尊家皆様御機けんよく被成御坐右御連士小子皆々御同意に
 相暮居申候乍恐御尊意易く思召可被爲下候

一參籠も當前は先月中にて相濟申候尤大にかけ御座候間是は追々に相濟し可申と奉存候先月廿五日より同廿九日迄晝夜つめだんじきにて執行仕候難有御事に御座候長々の參籠にて御座候得共無滯御影にて難有御事奉存候委敷御事は尊顔ならては難申盡候此度も誠に寸暇不得候間時候御機けん伺迄如斯御座候恐惶謹言

五月二日出

(御名切按)

石尾乾介様

尙々次第に暑に相趣候間諸事御用捨專一と奉存候以上

三七

石尾乾介様

黒住左京

要用無事

時分柄餘程暑に趣候處先以其御地 尊君様益御機嫌能被成御出務

候由珍重不斜御事に奉存候隨而當地尊家皆様小子皆々御同意に相暮居申候乍恐此段御尊意易く思召可被爲下候且道之事毎度御尋被遣勢ひは至極宜敷御座候得共先折合居申候しかし種々難有事は色々御座候其人々之一心に寄候而奇妙成事は段々と御座候誠に世の中の事は其人の心ほとすつの事と奉存候誠に古人の言にも心程の世を経ると申事の御座候を皆うつかりと口斗に流れて仕廻申候心神に成候得は則神也佛に成り候得は則佛也蛇に成候得は直にじや也其處外に道はなきと奉存候去人小子道を聞誠に病と申物はなきものと申所を悟り八年の風も引不申と被申本の小子甚感心仕候何事も心々に御座候先は荒々猶委敷追々可申上候恐惶謹言

六月二日出

黒住左京

石尾乾介様

一五二

尙々次第に暑に相成候間萬事御用捨專一と奉存候以上

三四

先月廿日出之尊札相達し難有拜見仕候先以甚暑之節御座候處其御地 尊君様益御機嫌能被爲成御出務候由珍重不斜御事に奉存候隨而當地 尊家皆様御機けんよく右御連士中小子共御同意相暮居申候乍恐御安慮思召可被爲下候度々道之事御尋被遣誠に奇妙成事は山々御座候得共不思議成事は其割に人之目覺不申候中にも辰巳の平六と申大家の百姓御座候近來至而信心仕候彼か妹十七才に相成候か當月八日の事に御座候か元來はへもにて候所甚重く追々さしこみ出醫者は妹尾岸田寛平と申大醫にて御座候段々に治りやう仕候得共彌さしこみ誠につくいき斗に相成候所へ小子參り少し手を

あて候處即座に開き其後は藥を相やめ二三度ほどましなひ候所此節はさつぱりと仕候誠に村中上を下へときはき付候所風の落たることくに相成申候誠に不思議成事に難有奉存候しかし是も小子力には無御座候自然の御影と奉存候夫のみならず御かけの事は色々御座候得共皆其人々の誠のなす所也と奉存候此度も折節指急き先は荒く如斯御座候恐惶謹言

六月十六日

黒住左京

石尾乾介様

尙々御地は如何に御座候哉當地は兎角雨天がちにて未餘り暑にも無御座候得共甚病人多に御座候諸事御用捨專一に可被遊候以上

三七七 先月九日出之尊札相達し拜見仕候如仰甚暑之時分御座候處先以

一五三

尊君様益御機嫌能御勤被遊恐悦至極に奉存候一森御氏も御勢ひ宜敷由御同慶に奉存候隨而當地尊家皆様右御同士其外一統皆々御同然に相暮居申候乍恐御安意思召可被下候且古田青地御兩所御出精之事御尋被遣青地は彌御勢ひ宜敷出精被成候か古田も随分出精も被致候共何とやら先年ほとには無御座やうに奉存候夫故時々はふさきなとも出候やう御座候しかし外の事に而は少も役に立不申由ましなひに而はくつろき候とて信心は御座候得共兎角今少かゆひ所え手のごとくかぬやう御座候御同人斗に而はなし誠にをしき事に御座候かく申小子をはしめとして思ふやうに參り不申候其奇妙成事は心ほとつゝに而天地の物はつかみとりに御座候に我とへだてゝ難義を致し候先は右尊答迄如斯御座候恐惶謹言

七月二日出

黒住左京

石尾乾介様

尙々此書狀先達而相調へ置候所間に合不申心外に跡より一所に指上申上候今少殘暑に御座候間萬事御厭ひ御務可被遊候以上

七〇

略々御尊免可被下候

一森彦六郎様

黒住左京

要用無異

秋暑未甚敷御座候處益御機嫌能被爲成御勤奉恐賀候毎度御繁榮之御中御念書被爲下難有拜見候隨而當地尊家皆様御機嫌能被成御座御次に小子義も御同然に相暮居申候此段御安意思召可被爲下候先達而も委敷御書被爲下候甚以奉感心候其時如仰最早御歸りも今少

に罷成候間積る御咄申上度と奉樂待候しかし近頃の道の心を少斗申上候

一近頃段々奇妙成事御座候中に伊東佐兵衛殿當五月頃誠に大病にて其元は廿六年跡よりのりゆういんにて年々色々と被致候所當四五月頃には彌六か敷被成治りやうも致方無御座食も一向通らす誠にひつしと相成自身にも覺悟被致候所へ段々の頼に付參り段々申内しよく藥どうらぬと申所御覺悟は御尤也しかし此道は形をは病にまかせ心は天照太神と御一躰と申心に御成り被成今より心ほごはさつばりと御平愈被成候さ候得は形も直に御なをり可被成と申候所不思議成かな廿六年の病其まゝ平愈被致廿日ぶりには出勤被致土用中も日勤被致誠に思は夢のやうに御座候其外色々成御事段

々御座候得とも逆も委敷は御直ならては相叶不申候間先は右の位におとろへ被成候ても如此候間萬事御一躰と御定被遊候得は誠に大丈夫に御座候誠に跡先亂筆にて相分り不申候得共御覽可被下候
恐惶謹言

八月二日

黒住

一 森様

文政十二年

二四

石尾乾介様

黒住左京

要用

重高に相成候間略々御尊免可被爲下候

一筆啓上仕候先以未春寒嚴敷御座候所先達而は御道中嘸無滯御着府被爲成候哉と奉存候目出度恐悦に奉存候隨而當地尊家皆様御初小子皆々御同意に相暮居申候乍憚尊慮易く思召可被爲下候且道も段々に相成候就右申上度義段々御座候得共迎も愚文にては難申盡しかし吉凶之所少斗申上候御聞も被成候哉志津摩殿御様子誠に驚入たる御事に奉存候則尊家御會にて古田より承り不思義に何ともがてん參らぬ位に奉存候誠に殘念成事に奉存候夫に引かへ福田氏は先月廿日之夕には誠に臨終に及一家一門寄合待て入ると申所に甚難義之躰にて今一度參吳候様頼に付參り其時小子心に思ふやう此道若

天照太神の御心に叶候は、只今爰にて祈返末代迄の道の印と奉存候八百萬神に祈付候所不思義哉祈念之跡にて手を少腹中え當候得は其苦み即座にねつも覺誠に夢の覺たる如に相成其場の人々誠にあきれ小子も誠に(切 抜)と申か何ともかとも申やう無御座夫より日々に快方に相成居申候夫に付段段奇妙成事段々御座候得共直に尊面ならては難申盡爰を以て案するに道は少之間も油斷相成不申候池田家も一度は此道にて誠に御影を御請被成なから只今にては大にゆるみ其所よりかやう成事出來仕候申上度御事は山々御座候得共難盡事候間先は荒々如斯に御座候恐惶謹言

二月十六日十三日に認

黒住左京

(花押)

石尾乾介様

尚々吟次も御間に合候哉何事も御遠慮無御申聞可被下候同人宿に

も(切 抜)別條無御座乍惶右之次第御申聞可被爲下候重高相成候間
書狀遣(不明)

五〇〇 一筆啓上仕候時分柄春暖相催候所先以其御地尊君様益御機嫌能被
成御出務候由恐悅至極に奉存候誠に段々恐悅に付殊の外御繁榮に
被成御座候所毎度御尊書被爲下奉感候最早追付御供にて御坂國被
遊候間尊顔ならては何ケくはしく難申盡候申上る迄も無御座候得
共何事御任可被遊候少も御自身の物には無御座候吟次も不相替相
勤候由毎度御申越被遊承知仕候萬事無御遠慮御申付可被下候乍惶
同人えも宜敷御申付可被爲下候且乍末御當地尊家皆様御機嫌能被
成御座御次に小子皆々御同然に相暮居申候乍恐尊意易く思召可被
下候先は尊書御請迄如斯御座候恐惶謹言

三月十六日出

黒住左京

石尾乾介様

尙々時氣御厭ひ御出務可被遊候以上
〆署〆御尊免可被爲下候

黒住左京

石尾乾介様

(尊館無事)

天保元年

五〇 任幸便一筆啓上仕候時分柄秋冷相催候處其御地 尊君様彌御堅康
に被成御出勤候由珍重不斜御事に奉存候隨而尊家皆様御機嫌能被

成御座御次に小子皆々御同意相暮居申候乍恐御安意可被爲下候且
道之事毎度御尋被遣難有奉存候誠に正はかくれ邪者あらはれ候事
天地自然之利也しかし夫も能々相考へ候得は却而たもち候哉と奉
存候善惡共に天に打まかせ候得は少も望みと申物無御座候一首

何ことものそみ無ければ世の中に

たらぬことこそなかりけるかな

委敷者乾介様より御聞可被爲下候先は荒々如斯恐惶謹言

八月四日出

黒住左京

一 森彦六郎様

尙々時候御るとひ御出務可被遊候以上

四九 一筆啓上仕候時分柄秋冷相催候處先以其御地 尊君様益御機けん

よく被爲成御出務候由珍重不少御事奉存候隨而御留主様御機嫌よ
く小子皆々御同意に相暮居申候乍惶御尊意安く思召可被下候然者
先達而御同姓様誠に御氣毒に奉存候其節者甚御心配様と奉察候し
かし御尊書承候得は兼而御執行目に相見へ申候何事も天命に御任
せ可被遊候少も御身上におゐて御氣遣被成間敷候先は時候御ると
ひ可被遊候先は荒々如斯御座候恐惶謹言

八月十六日出

黒住左京

一 森彦六郎様

三四〇 伏見出の尊書早々相達難有奉拜見候乍恐 御上様御機嫌能被爲遊
御座候由奉恐悅候 尊君様御機嫌能被爲成御座候由奉恐壽候定而
御道中無御滞御着府被遊候哉と奉恐悅候隨而御留主御二方様御機

三六
嫌能御次に小子皆々御同意に相暮居申候乍恐御尊意安く思召可被
爲下候道も先折合居申候今日も甚世話敷奉伺御機嫌候迄如斯御座
候恐惶謹言

八月十六日出

左京

石尾様

尙々一首

天照す神の御徳はあめつちに

みちてかけなき恵み成かな

三四一
一筆啓上仕候先以秋冷相催候所先達而者御道中無御滞御着府被爲
成御座已來彌御機嫌能被爲成御出勤候哉と奉恐壽候御道中よりも
段々に御念書被爲遣難有奉拜見候隨而當地尊家皆様御機嫌よく御

次に小子皆々御同意相暮居申候乍恐御尊意安く思召可被爲下候道
も先折合居申候兼々御咄申上候通兎角道者心一つと奉存候生るも
死るも心一つと奉存候時に一首

いきものは心一つに有物と

おもへはたれも生物となる

心いささへ仕候得は神也佛也人也と奉存候申上候に者及不申候得
共こゝろにうかむ事其ま筆に書申上候先者時氣御見舞旁々如斯
御座候恐惶謹言

九月二日出

黒住左京

石尾乾介様

尙々時氣御厭ひ御出務可被爲成候以上

一三六

一筆啓上仕候時分柄餘程寒さに相成候處益御機嫌能被成御出勤候由珍重不斜御事に奉存候隨而當地尊家皆様御機けんよく御次に小子御同意に相暮居申候乍恐此段御尊意易く思召可被下候先達而も御留主様より承り候得は御同姓様之御事何か付御忘れ不被成との御事御尤には奉存候得共最早跡へ歸らぬ事御座候間爰か則祓の處にていつ迄も歸らぬ事をしどふはしゆうちやくにて過たる人のため甚不宜尊君様の御ためも不宜候間御ちやくを御やめ被成候而時々御祭り被成候方宜敷候間さつばりと御ちやくは御はらひ可被成候先は時候御見舞旁々尊答迄如斯御座候恐惶謹言

十月十四日調

黒住左京

(宛名切抜)

尙々時候御ひといい御出務可被成候時に一首

有物はあるにまかせて無物を

養ふ人そありかたきかな

是は何ても引合候様に奉存候とかく心を養ふ處大いと奉存候以上

三〇

先月十六日出當月二日出之尊書相達し難有奉拜見候時分柄寒氣嚴敷御座候所其御地尊君様益御機嫌能御出務被爲遊候由珍重不斜御事奉存候隨而當地 尊家皆様御機嫌能被成御座殊に 御尊父様彌御順快被遊吳々も恐悦に奉存候次に小子皆々御同意相暮居申候乍恐尊慮安く思召可被爲下候道も折合居申候しかし爰に一つ奇妙成事御座候委敷事は尊面にて無御坐而は難申述候得共道歌一首

天てらす神の御心人心

ひとつに成れはいきとうしなり

此歌去門人誠にまつこに及候所へ参り此心をとき申聞候得は其ま
ゝ苦痛を忘れ夫より日々快方に相成り誠にせんだいみもと申御
事と奉存候難有御事奉存候御一たひと一心をきわめ候得は死と申
事はたへてなき事と奉存候彌生とうし所御務可被爲下候先は尊答
迄如斯御座候恐惶謹言

十一月十六日出

黒住左京

石尾乾介様

尙々次第に寒氣彌増候間御用捨第一と奉存候以上

天保二年

六三

先月十六日出之尊書同廿六日に相届奉拜見候如仰未餘寒難去御座
候處彌御機嫌能御勤被遊奉恐壽候隨而爰元尊家皆様御機嫌能被成
御座次に小子方皆々御同意に相暮居申候乍恐御休意思召可被爲下
候然は先便之御書面にて者甚以御心配之段奉察上候乍併ヶ様成時
社かの天命に御任可被遊候萬事何事も御斗被成候には乍恐 天照
太神様を御念し被成候而其上にて決而御氣遣者無御坐と思召御取
定可被爲下候此方にては宜敷御祈念申上置候誠に御心大丈夫思召
諸事御斗可被成候遠路之御事御座候故一々御相談も相成不申候右
之通被遊候得は誠に御安氣成御事奉存候御歸國今少に相成何事も
御直に御咄し可申上と相樂奉待上候先は尊答迄荒々如此御座候恐
惶謹言

二月二日出

黒住左京

一森彦六郎様

尙々今少之寒さに御座候間諸事御用捨大いと可被遊候以上

六七

一筆啓上仕候未餘寒難去御座候處彌御機嫌能御勤被遊候由珍重不
少御事に奉存候隨而當地尊家皆様御次に小子女方皆々御同意に相暮
居申候乍恐御休意可被爲下候先達而も御申趣被遊候御心配筋も如
何に御座候哉此方にてても宜敷御祈願申上置候間先頃も申上置候通
萬事天命に御任被遊候得は御氣遣者少も無御座其上御由斷無御座
候得共每朝東に御向ひ被遊日神様へ御拜に今日も何事も御影にて
別條無御座候様にと御祈願被遊候而御疑ひ御晴し被遊候得は誠に
御大丈夫に御座候其御心得に被遊候得は小子も日々御拜仕候間萬

事御安心被遊可被下候何かと申内御歸國も今少に罷成候故御直つ
もる御咄し可申上と奉樂待候道も近頃者大に開小子も甚世話敷難
有事は數々出來難有御事御坐候吳々も御直ならては難申盡餘書者
尊顔にて萬々可申上候恐惶謹言

三月二日出

黒住左京
(花押)

一森彦六郎様

尙々時候御厭ひ萬事御用捨專一に可被遊候以上

天保五年

七一

略々御免可被爲下候

一森彦六郎様
要用

黒住左京
無異

一筆啓上仕候暖和彌増に御座候所彌御機嫌能被成御勤候由珍重不
過之御事に奉存候隨而當地尊家にも益御機嫌被成御座候次に小子
義も御同意に相暮居申候此段御安意可被下候承り候得は少々御勝
不被成候由富田様より御聞被成候とて御母上様御心配被成御申越
し被遊早速宜敷御祈願仕置候所御氣遣は無御座と奉存候申上候迄
も無御座候得共何事も〳〵天命に御任被成候得は少も〳〵御氣遣
は無御座彼是申内御歸國も段々近寄候間積る御咄可申上と奉樂待
候折節指急荒々如此御座候恐惶謹言

三月二日

黒住左京

一森彦六郎様

尙々随分〳〵御養生專一に被遊其内御心之御養生一大事と奉存候

以上

七一

略〳御免可被爲下候

一森彦六郎様

黒住左京

貴答

無異

先月廿二日出尊札相達忝奉拜見候彌御堅康に被爲御勤候由しかし
少々御のぼせにて御難義被遊候よし被仰聞奉承知宜敷様御祈念可
奉申上候しかし是も御内に御座候より御はつし被遊候方は却而御
爲宜敷哉と奉存候乍去當時難義様と奉察候しかし御文面通り之思
召之所にては甚以奉感心候彌以天地に御任御暮可被遊候隨而當地
御母君様彌御機けんよく被成御座次に小子も近頃は大に行程は丈
夫に相成難有事に奉存候先月共は和氣迄八里之道を下駄に參候得

共格別つかれも不仕候何事も心一つと奉存候善悪共に皆御影と奉
存候心を養ふ時は自然と形はたつしやに相成候哉と奉存候吳々も
萬事天命に御まかせ可被遊候何かと申内御歸國も段々近寄つもる
御咄し御直に可申上と奉樂待候先は尊答迄如是御座候恐惶謹言

四月十六日出

黒住左京

一森彦六郎様

尙々其御地は如何に御座候哉當地甚時候定り不申不順成御事御座
候随分、萬事御養生專一に可被遊候以上

天保七年

五九

略々御尊免可被下候

改年之御慶重疊目出度申納候先以御機嫌よく御越年被爲成候哉と
目出度奉恐壽候隨而當地尊家御母君様初小子皆々御同意に嘉年仕
候此段御休意可被下候去冬は度々尊書被遣拜見仕候誠に昨年何か
御心配つよの御年と承り候しかし思召寄之趣至極奉感心候御みく
し數々御越被遊候へとも御縁談之御義に御座候得は先御預り置申
上候夫は如何と思召哉此度は神圖をはなれよき卜者に御見せ被遊
候而最早御相談相濟申候故却而御迷ひ相成可申候と奉存候易者の
義も小子御進め申上候此度は随分、宜敷と奉存候何事も、親
様次第に被成候而此度者少も、御心遣ひ被遊間敷候只尊君様に
はおもての事斗御大事被遊内方は母様次第と御定被爲成候方始終
繁榮と奉存候何かと申内當月は早立候は、日々御歸國も近寄候間

委敷御事は御直談にて萬々可申上と奉待候先は荒々如此御座候猶期永春之時恐惶謹言

正月十六日出

黒住左京

一 森彦六郎様

尙々今少之寒さに御座候間時候折角御自愛專一と奉存候以上又々申上候本文には御みくし御預り置候と申上置候得共先御返し申上候御くし各不面白候得共其七本めは宜敷御座候しかし若此内に秦御氏共無御座候哉たとへ此みくしに不宜とも是は早卜宜敷候得は丹せいに相成と奉存候間是は宜敷に御定可被成候猶委敷拜顔にて萬々可申上候以上

又々申上候千石様一件も相濟大慶に奉存上候猶追々御直に拜聞

可仕候以上

四四

略々御免可被下候

一 森彦六郎様

黒住左京

貴答

無異

先月十六日出之尊札同廿七日夕到着仕難有奉拜見候彌以御機嫌に被爲成御勤候由奉恐壽候如仰未寒退兼候得共爰元は此一兩日大分暖に相成甘居申候此書狀參上仕候迄には御地も彌暖に可相成と奉存候御文面之趣にては御地は火事御座候由諸々いやなる御事にて嘸々御心配と奉察上候しかし其所か天命に御任せ被成候處と奉存候か様申上候内午末筆に相成候得共爰元御母君様彌御勇敷被成御座奉恐悦候次に小子方皆々も御同意に相暮居申候午惶御休意可被爲下

候定而御母君様より御申上被成候哉とは奉存候得共御縁談相濟此
上も無御座目出度御事に奉存候彼是申内日々に御歸りも近寄何か
つもる御咄申上たくと奉樂待候先は右尊答迄如斯御座候恐惶謹言

二月二日出

黒住左京

一 森彦六郎様

尙々時氣折角御自愛專様と奉存候吳々も御歸國近寄候を奉樂待候
以上

畧々御免可被下候

一 森彦六郎様

(御名切抜)

要用

當月二日出尊札同十一日に相達難有奉拜見候彌以御機嫌能被成御

勤候由奉恐壽候隨而當地御留主様御機嫌能被成御座目出度御事に
奉存候殊に御縁談相濟申一段之御事に奉存候次に小子義も御同意
に相暮居申候乍惶御休意可被遣候御文面之通り最早御歸國も段々
近寄居申候つもる御咄可申上と相樂奉待候定而御聞も被爲成候哉
と奉存候御國にも種々之事出來仕候氣毒千萬に奉存候其元は皆少
之心からと奉存候返すくも心と申物はあふなき物と奉存候委敷
者尊顔萬々可申上と奉樂待候先は尊答迄如斯御坐候恐惶謹言

二月十六日出

黒住左京

一 森彦六郎様

尙々今少餘寒御用捨專可被成候以上

天保九年

一八〇

八二 以手紙御歡申上候先日者御念被入安之介様御出被下出違不得御意御殘多に奉存候然者此間者御奉行様御付被成恐悅に奉存候貴所様にも御付廻御座候由左様可有御事とは奉存候得共少し心に懸心配仕厚く奉祈候所に彌御高運にてケ様に御成被成候は、最早大丈夫と申にて御座候緒々難有御事に奉存候先達而より段々に心願仕候御札守夫々令進上候間別に印相付候方者何時迄も御棚に御納置可被下候是に者大分一心を込候御札に御座候委敷者拜顔にて万万可申上候いつも急大亂筆御推覽可被下候恐々

九月十七日

黒住左京

志賀淳平様

尙々皆々様へ宜敷御歡御申上可被下候以上

八三 廿三日御認之御細書被下拜見仕候如仰其後者打絶御遠々敷御座候彌御揃被成御堅康に被成御坐候由大慶不少御事に奉存候近頃者七ヶ年此方之御繁多御用多之御様子奉察候しかし人者暇にては不宜候と奉存候右に付段々之御長文之趣一々承知仕候近日には彌御引移り被成候由扱々兼々之御大望御成就にて小子迄難有御事と大慶至極奉存候嘸々皆々様御歡と奉察候右に付御祈禱之義段々に被仰下夫々宜敷祈念仕候御念被入爲御初穂と御國寶五封夫々に御備被成下慥に神納仕候則御札守進上仕候間御納め可被下候且又段々之御文意之趣一々拜見仕候御尤には奉存候得共則仰之通何か格別之御開運と奉存候間此度をさかへに御陰氣を御はらひ可被下候其積

一八一

にて宜執行仕候御聞及にも御坐候小子も近來者誠に大開にて難有者奉存候得共手も足も合不申候次第に御座候夫故申分も無御坐御無音のみに御坐候何事も拜顔にて御悦ひ猶積る御咄可申上候先は右御受迄如斯御坐候甚急亂筆御推覽可被下候頓首

十月廿八日

黒住左京

志賀淳平様

尙々皆様へよろ敷御歡御申上可被下候早々以上

又々申上候鳥渡神龜奉伺候處至極宜敷御座候猶又宜敷祈念可仕候以上

三六一

一筆啓上仕候先以先達而者御道中無御滯御着府被成候哉と奉恐壽候隨而御地御兩公様初小子皆々御同意に相暮居申候此段御安意可

被遊候且又御留守様より承候得者御問合之事に付定而御心配被成候哉と奉遠察候しかし左様之所甚御心得御大事御座候たとへ何ほと之御事出候とも少も〜御いかり御出し被成間敷候追〜は何ごとか出も不相知と是ぞ誠之執行と思召少も〜御心を御いたため不被成柳之風に流るゝ様に何ほと之事も御なかし被遊候道之爲と御心得被成候得は追々は皆御身之御爲と相成可申候此方にても夫のみ祈り申上候萬事御影と思召たとへその場者御すて置被成かたき事御座候とも皆世の有さまと思召御ぬかし可被成候皆邪は正之本と相成物に御座候さもなき時は彌御影と御存被成難有く一へん被成御務可被遊候先は荒〜如斯御座候尙追〜可申上候恐惶謹言

霜月二日

黒住左京

尙々時候御厭ひ御出勤可被遊候以上

天保十年

一三四 一筆啓上仕候時分柄殘暑甚敷御座候處先以御機嫌能御勤被成候由珍重不斜御事に奉存候隨而當地 尊家御兩所様何之御別條も無御座次に小子皆々御同意に相暮居申候此段少も御案し被遊間敷候時分からにて少々例之御持病出候共何も少も御心遣ひは無御座と奉存候若御兩方何れ様之方より御手紙參り候共御心配被成間敷候直に宜敷御折合に相成候哉と奉存候御内方御母様は尊君様御大事か一ばい御座候得はいか様にも御存寄次第に被成候哉と奉存候御奥

様御里方はいかゝ成御存寄かは相分り不申候しかし此御方とてもいつれ御心配被成候様成御事は有間敷と奉存候たとへ少々いか様に相成候共皆天命に御任可被遊候とは申候とも先日も參上候處何之御替も無御座小子申上候は奥の手の所を申上候少も御心配被遊ましく候

古歌にも

世の中は月に村雲花にかせ

おもふはわかれおもはぬはそふ

誠におもしろき歌にて萬事此心はなれ不申候たゞ何事も何事も天命〳〵御安心被成候得は其餘は小子とも不及なから御力にも相成可申候先は心にかむ事其まゝ申上候吳々も御心に御かけ被成ぬ

やう奉頼上候か様成事を申上置候も尊君様御身上之餘り御大事に
奉存候間常々の御心得申上置候今小子身上之事にてもつまらぬと
奉存候得は誠につまらぬこと斗何程か御座候哉相知れ不申候しか
し是皆世の有様と奉存候得はまた面白く御座候申上度御事は山々
御座候得共愚文にては思ふやうに難申盡先は荒々筆を留申上候恐
惶謹言

七月十六日出

黒住左京

(宛名切抜)

尙々時氣御るとい被遊御大丈夫に御務可被遊候とかく何事も小道
に御寄被成間敷候大道は天地一ばい也いかにもく例之有かたひ
にて御務可被遊候以上

先達指上置候と奉存候得共又々申上候

一筆啓上仕候未殘暑甚敷御座候處先以御機嫌能被成御勤目出度御
事奉存候隨而當地尊家御兩所様御機けんよく被成御座次に小子御
同意に相暮し居申候乍憚此段御安意可被爲下候度々道之事御尋被
遣難有滿れはかけかければ満ち色々と相成申候古歌にも

世の中は月に村雲花に風

おもふはわかれ思はぬはそふ

此歌萬事に叶ひ候やうに奉存候大事とおもふ人に分れ候かと思へ
は又存も寄ぬ人又道にしたかい又々懇意成も世の中の有様如此右
に付尊家之事をつらく相考へ候得は今尊所様御身に取候得は春
方之通り御心配被遊候御事も御座候得共又御折合被成候は、何之

へんも無御座御安心に被成御座候夫につき下廻にて少々承り候事も御座候萬萬一御里方より悪智へどもは無御座や萬々一日笠御氏より色々の御事御申出御座候共何事も留主へ御懸合可被成候と先御答可被遊候其わけはたとへいか様成事御座候共御留主には御不和と申事は無之と申候御心さしと相見へ申候是は萬々一之御用心に申上候申上度御事は山々御座候得共先は時候御見廻旁々荒く如此御座候恐惶謹言

七月十六日出

黒住左京

一森彦六郎様

尙々最早暑も下り坂に御座候得は随分く御用捨專一と可被遊候以上

一五三

追而申上候此手紙相調置候所へ先月廿八日出尊札被遣難有拜見仕候先達而者餘程勝れ不被成候處早速御快氣被爲成目出度御事に奉存候且本文に申上候通彌御里方悪ちへに相違無御座たとへ何事を御申上被成とも萬事母へ申遣候間宜敷御懸合可被下と御申置可被成候邪すいながら外に望も可有と奉存候しかし本(破損)申上候通り何事もく天命とおほしめし少も御氣に御さへ被成間敷候先は荒々申留候以上

六五

當月五日出尊書同十五日夕相違奉拜見候其中相認指上置候得共御みくし御座候且御受申上候益御機嫌御勤被遊奉恐賀候仰被下候御趣にて者來四月迄御詰越被遊候由尊顔之處少々御延引に罷成候得共誠に御出精之御事故此上も無御坐恐悦に奉存候隨而當處にも別